

あさ

特集 日本の道 (一)

第 5 号



44-6 夏季号

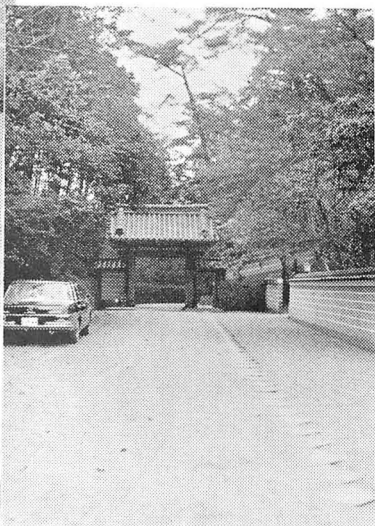
「竹影」

松木草垣女史 彩管





春一日、円照寺(奈良)に
桜を訪ねられたお三方



左より二人目お嬢様、山本静山尼、一人おいておやかたさま、苑主先生

目次

「あさ」第五号

巻頭言

|| 現代の苦悩に応える ||

松木天村

5

天の理

6

特集 日本の道

閑院純仁氏への御垂示

廿一世紀に向う日本の使命

閑院純仁

16

日本の道(上)

西沢嘉朗

56

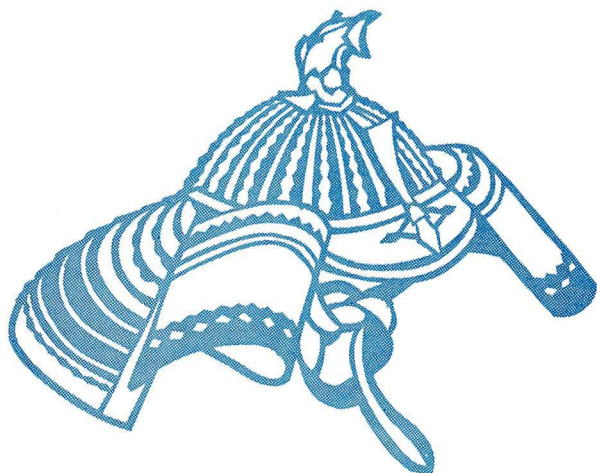
あたらしい道と日本

矢野誠一

28

―はじめて本誌を読まれる方

新しくおつながりになった方のために―



グラビヤ（桜を訪ねられたお三方）（槌音響く）

支
部
だ
よ
り

関東地区教務局設置にあたって
福井道場 上棟式を終えて
村尾氏 ハワイへ 出発

よりどころ（増改築はじまる）

み
ち

ドカン ドカン

八木 隆明

課題に 応える

田口 尚

山崎 徹治

松木天村講演集

日本の明日を予断する

松木天村

紀州路へ

秋田 富雄

早春の四国路へ

高坂甚之助

松木天村 ロータークラブ・ライオンズクラブゲストスピーカー日程表

松風 録（昭和四十四年五月七日の松の間より）

52

75

69

66

76

90

63

51

93

92

91

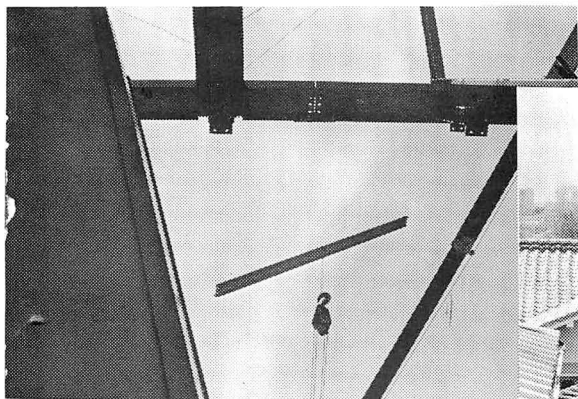
表紙

「花」・「院友」

坂井 屯 支

書・重田錫川・加納知香・カッター・小野佳二

槌音響く



ほって

据えて

昭和44年 春



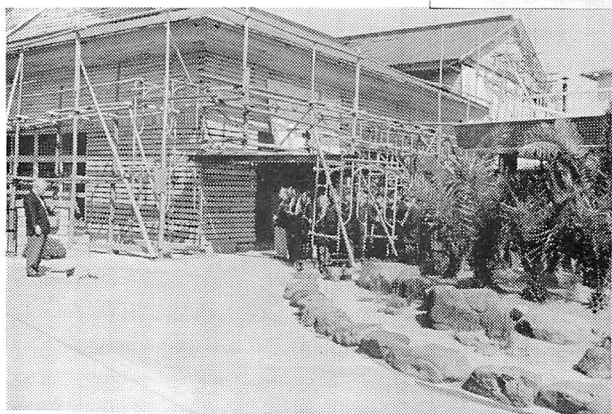
立て

そえて



よせて

組んで



建てよる。よって たてよう。



にいせろ しづ こ
新室を踏み鎮め子し

手玉鳴らすも

玉の如照りたる君を

うち まお
内へと白せ

(万葉集より)

卷之二

現代の苦悩に應える

松 木 天 村

デカルト以来三百年「吾おもうが故に吾あり」と、心
《知性》を人間の基底としてきた学問は、二十世紀にお
いて絢爛たる文化の華を咲かせたが、今その極限を露呈
し、混乱と焦慮に陥入っている。

心の深奥にはさらに高次の根元が潜在する。この基根
は生のスタートから死のゴールに至るまで、人間の運命
を支配する無限と有限のつながる「真空妙有」の場であ
る。この場を新しく再発見し把握することが、今日以降
の重要な課題となった。

これに應えるものが「新しい道」である。この道は、
日本の理念を新しく見出して現代に甦らしめるとともに、
宗教・科学・哲学を綜合し道として統一するものであり、
主義《知性》を超えて妙所《靈性へそ》の叡智に導かれ
て、大和民族の本来性に立還る普遍の道の展開である。
来れ、来りて見よと叫ぶ!!

昭和四十四年五月十日 於 松 籟 閣

根の理を吟味し気魄を出しや

唯今、このところから、御一統さん、こう申します。御一統さんは、根のつながり、これおわかりでしょうか。根のつながりです。これを知って、今さらのように、根のつながりは、さあ／＼、これでおわかり。みんなあさん、根でございます。根のつながりです。つながっています。つながるからには、これを知る。おわかりでしょうか。

唯今から、もう一つ。この道には、ふるまい、これおわかりですか。さあ／＼、ふるまいやで、それを知らないだろ。だからしにくい。ふるまいです。さあ／＼、さあ／＼、これだけで、一応、手前は、お座ぶとんを、頂戴して、それから、又々、申します。さあ／＼。

それでは、唯今から、みんなあさんが、一遍どおり、なるほど、自分らは、根のつながりだった、事あらたに、思いみましょう。こういう風に、ぜひとも、気分を変え。その必要があります。根でござる。そのつながり、おわかりですね。さあ／＼。

根のつながり

さあ／＼。つながったという事は、口で申しますけれど、それはどうですか。根を、ほら／＼、分けるでしょう。そうして又、別なところに、植えるでしょう。そうしたら、ほらほら、もうお分りでしょう。どうです。この道は、もと根じやえ、こう申しました。喜んで、みんなあは、そら／＼自分／＼が、各地で、分離されて、まにあうような、一本立ち、そういう風に、今年中ぐらいに、成るはずです。おわかりでしょう。

天はいう。この道のお方、そういう風に、元から、吟味して、仕込んである、そう申しました。この意味を、よく／＼、ご納得、さあさあ、おわかりでしょうね。

天はいう。吟味という。みんなさん、浮世には、色々／＼、いい事もある。いい話もある。有難いお人もおる。けれどな、吟味というからな、ほら／＼、吟味やで、人はみんな、吟味せんならん、これが理です。おわかりでしょう。お前さんら、この道を、もつと、何故、早く、吟味しなかつた。こらやい、吟味したら、自分らも、もつと／＼、どえらいもんじや、成つちよるんえ、こういいます。あらまあ、吟味ですよ、吟味しましょう。吟味せんならんえ。吟味屋じや。これが道、おわかりですか。手前の方は、(註・おやかた様) まあ、まあ、そりやそりや、吟味しましたえ。ですから、多少は、みなさんとしては、煩いな、しにくいな、そう思うでしょう。けれどな、世が世だから、吟味の吟味、そりや当然おわかりのはずです。そう、そう、そう／＼、気がついた。吟味しちやつた。これが理。おわかりですね。

ひとよの理

それからいいます。あたらしい道は、ひとよの理、こう申す。あらまあ、これからが、ひとよの

理を、みんなに、ほうら、思いおこせ、思いおこすんじや。さあ／＼、さあ／＼、今日の日まで、おう／＼、おう／＼、ひとよの理、一杯、はめてある。おわかりでしょう。あ、もこうも、理々々、理ばっかしを、ゆいしました。それ、ひとよの理。ほら／＼、こういう世には、理が必要。理で以つて、どうしようもない、そういう時節が、又やつて来るんえ。おわかりなさいや。今のうちに、理の理を、あれこれ／＼、仕入れておきや、わかつたでしょう。ひとよの理、ほうら。

裏が頼りやで

みんなさん、この世は、一本ぎり、これをもつて、ひとよの理と申します。さあ／＼、さあ／＼、さあ／＼、有るんなら、なんにも、い、切る必要はない。一本ぎりやでな。ひとよの理、こう申す。さあ／＼、気がつくでしょう。この道の方が、表と裏で、あらまあ、精一杯やで。ほら／＼、ほら、ほうら。表と裏、表だけなら、そこら中にある。この道はな、ほうら、裏返しじや、裏の方じや、裏又裏、裏々々、裏が肝心。みんなよ、表だけでは、埒あかん。裏があるんえ。裏の方が、ぬくとうてな、さあ、さあ。表は一重、裏が重なるから二重、二重三重、みんなわかる。裏のほうは、あらまあ、ぬくとうてな。さあ、さあ。

表だけでは、ちめたいで、わかるだろう。そうら、お体裁じや。だからちめたい、おわかりでしょう。裏のほうは、なんでも屋でな、さあ／＼、ぬくみじや。さあ、ぬくとうてな、さあ、どう。みなさんよ、裏が、頼りやで。ほうら、裏があるから、ぬくみじや、さあ。

この道は、表から始まって、裏でございました。裏になつたら、しにくい／＼、窮屈／＼、とんでもござらん。この道だけが、裏を申す。裏・裏・裏・裏に裏がある。あらまあ、裏返しを、し

ましようえ。なんぼでも、裏返ししいや、これが道。さあ、さあ、みんなさんに、この道の手を、自分というものから、多少ぐらいいは、どうです、かけ離れて、思つてごらんや。裏が大事や、裏の方が、あら、そうです。表の方には、何かしら、人を魅きつけるものがある。そりや、当り前じや。お行儀よく、手を、そろえてるで。それだから、裏よりも、表が立派じや。裏の方は、それに、それに、みい、みい、や、こしいな。だからしにくい。裏をな、みんなよ、さげすんだら、全部根こそぎ、やれ、だめじやわな。さあ、さあ、さあ。裏を大事に、裏を思え、表よりも、裏を思え、さあ、さあ、さあ。これだけを、どうです。吟味に吟味、吟味中の吟味、それ今でしょう。さあ、どう、どう、どう。どうや、吟味しいや。これだけが、おわりならば、この道は、ほんとうに、えもいえん、徳の徳、徳じやえ。あらまあ、ちみ、ぬく、み。あらまあ、まあ、まあ、ぬくい。ほんとうのほんと、真実、誠は、この道であります。さあ、さあ、さあ、誠によりかけ、これが、みんなへの、さあ、急き込みじや。ほう、ほう、ほら、ほら、ほら、誠によりかけや。これどうですか。みんなよ、誠だろ、その誠に、撚りをかけないと、今の世には、もちにくいで、なあ、なあ、なあ、なあ、な、な、な、な、どう。

はつきりゆうで、誠を知らん、誠を知らない、そういうお人が、おるな。あらまあ、誠を知らん、さあ、さあ。天の場、この場、この道、このところ、これはな、誠だけが、さあ、さあ、誠じや。誠のないものなんか、気がないだろ。これをいう。さあ、さあ、誠を見せや、さあ、どう。誠を見たいな。誠を見たいんじや。誠を見るのが好きやで、あらまあ、誠、誠、まあ、まあ、まあ。

次、々、々、次から次、ほら／＼、とどまらんわいな、それが気魄じゃ。

月 読 み

おわかりなさいや、どうです。自分で自分を、加減しすぎる。そういうお方のほうが、お、かたじゃ。あらまあ、まあ／＼まあー、まあー、まあー。これだけで、一服いたします。みんなーさんのほつとしましょう。それでは、朝の太陽、どうやら、阿倍野から、この場に、移ってまいった、あの頃でしょう。あの一年ぐらい、まあ／＼、朝の太陽でした。それでよかつたんでしよう。ですけれど、もうそれから、どん／＼／＼、理は進みました。どうやら、夜の月、それに気がつくんです。いつまでも／＼、相変らずに、朝の太陽を、念がけている。そういうお方の方が、多いのでな、しにくいわな。それ、おわかりでしょう。みんなーさん、夜の月さん、たまにしか、見せてもらえない。それをな、自分のお腹は、年中、ほらやい、月々々、がんばりましょうえ、それが道。さあ／＼、さあーさあー、さあー、月を読む、月を読み、さあーさあー、月よみの理。さあー、どーじゃ、さあー、どーじゃ さ．．．．．さ．．．．．さ．．．．．

．．．．．さ、つきよみ、気がつきましょう、おわかりなさい。見えん理を戴くのが、みんなあさんの、誠でした。誠が薄いから、見えん理を、ほら、そつちのけ、あんまりじゃえ。さあ／＼、さあー、さあー、さあー、見えん／＼、目には見えん。見えん方が、ほら／＼、徳じゃわな。さあー、さあー、さあー、これだけで、一切合切、読みましょうな。あたらしい道は、これからが、ます／＼読むところーでございます。はい、これだけでございます。みんなーさん、よくき、ましよう。これから、ます／＼、浮世からは。でもな、みんなーは、よみによみ、よみ／＼、よみき

つておるだろう、と、しましうえ。さ、そこがじゃ、しにくいなー、これだけです。

さ、一切の理を、頭の中で、又憶い出します。それでは、これぐらいで、今、一応、けっこうでしよう。はい、けっこうでございました。

昭和四十四年四月八日 紫の間 二垂示抄

解 説

このご垂示は、四月八日午后二時より執り行われたお式に於いて賜わりたるご垂示であります。この道は、祭神も祭壇もありませんので、お祭りではなく、お式と申します。このお式には、天からのふるまいがあります。ふるまいと申しますのは、我々の先祖に対する救いの理であります。

には、真の救いのあろう筈はありません。恰も川上にて、にこりおるものを、川下にて清め得ざるが如く、我々人間も先祖があつてその今の自分であり、先祖（前生）が救われ得ずして、如何ほど人智が進んでも、お金が有つても、物が有つても、それだけでは、絶対の救いと、成り得ないのであります。

実を忘れ虚飾を競いあう今の世

この先祖（前生）を、人間の根

と申します。この人間の根は、元へ／＼と、どこまでも、始まりまるで、つながっております。おやかた様は、この始まりの（種の尊）元親様であらせられます。元親様なるが故に、我々この道につながらつた者は、川上に於いて、にこりおをさらえるが如く、人間の根を淨化育成（業取りの理）して頂き、末代までも救い切つて頂くことが出来るのであります。

人間一人を救いけることにより、始めて可能な国助けの理は、人類史上、未だかつて成し得なかつた天業なのであります。この天業を果しお、す為には、おやかた様の手足と成つて働くことの出来る臍通りに成つた人が、千人是非必要なのであります。

おやかた様が、神秘（臍の音）におなりに成られてより十八年、その間、寸分違わぬ天意のまゝ、表から裏、その又裏と順序通りに、お通りに成られ、その通り越しの理を元として、我々道の子に二度も三度も、繰返し／＼お教え下さつておられるのであります。我々道の子は、今一度、深遠なる天意と、おやかた様の通り越しをよくよく吟味し、自分にあてはめて悟り取り、誠より以上の誠を、捧げようではありませんか。

紫の間に於ける閑院純仁氏への

天からの御垂示

さあ、ほらく、ほらく、ほらつ、さあ、お前さん、これが本当、お前さんよ、もうわかった。身の内、さんくじや、さあく、さあさあ、さあー。

さあく、どうく、新しい道、最も古い、かみながら、それを申す、よう受けや。

今の世、これは、まあ、まあくじや。

天は言うで、この道あつて、この道あるから国が助かる。何故言うだろう、それには訳がある。

その訳は、何れく自然がちやんくと見せるだろう。さあく、さあ、さあー、お前さん、

この道は、天の理じや、天そのもの、天じきく天がじきくに、何かと申す、それをなあ、受けとりや
さあ、それから、何れはなあ、お前さんに、ほらくもらつてもらおう、あるものがある。

それは何んだろう、今から言うで、

お前さんく、さあく、さあーさあー、さあく。

この女、不思議なことじや、何を言うだろう。

それはなあ、何んとまあ、すめらの理、それを言うで、何れ言うで、その折にはお前さんく、お前さんに、さあく、なあ、なあ、なあ、なあく、まるくともらつてもらおうーえ、こう申す。

さあー、さあー、さあく、さあー、さあー、さあー。

お前さんよ、今から申す、この道はなあ、その人次第、その人によって、救われて、救われて、救われ切る。それが本当。

二十一世紀に向う

日本の使命



園 隲 純 仁

新しい道の信念

「新しい道」の機関誌「あさ」のために、「日本」ということについて、何か書いてくれという御依頼である。従って、そういう観点からこの課題を考えてみなければならぬ。

それにはまず「新しい道」の本質を明らかにすることが前提となるが、そういう解説は、この道に、つながってから、未だ甚だ日の浅い私は、到底その任ではないし、また、

本誌の読者は、大体この道に、つながりのある方々であろうと思われるから、その必要もないわけである。

しかし、本稿を草するに当って、まず始めに、どうしても明らかにしておかなければならないことは、「新しい道」は、日本の危機を救うために生れたのであり、日本は、この道あるがために救われる」ということである。これは、「新しい道」の叡智者天人女史の宣言である。

そういうと、この道を知らない多くの世人は、誇大妄想と一笑に付するかも知れない。事実、過去に於て、同様な発想に基いた宗教や、運動は、幾つか数えられた。またか

と考えるのも無理はない。そして、過去の例は、一片の大言壮語に終っている場合が多いのは事実である。

しかし、この道の発生過程を知り、松木天人女史が、世間的にも家庭的にも、また経歴的にも、ごく普通の一女性から、自から求めたのではなくして、突如天啓者になられた事実を知らされ、また、この道の推進者松木天村氏が、色々な機会に於て、この道の本質を、力説し、解説しておられる所を聴けば、これが、一片の誇大妄想や、大言壮語でないことは明らかである。

この道に志す者は、勿論私をも含めて、これは確たる信念である。

しかし、門外の第三者が、これを如何に解釈し、如何に批判するかは問う所ではない。

日本の現状と世界の情勢

廿世紀は、余す所三十年、やがて、廿一世紀を迎えることになる。

まず、日本の現状と、世界の情勢に、眼を注いでみよう。最近の、日本の状態は、まさに、革命の前夜であるといつても過言ではない。外国には、革命の歴史は多いが、日本には、革命が起る筈はないと、従来は、考えられていた

が、現在では、そう安閑としていられない時代となってきた。わが国は、昔から、幾度か困難に際会してきた。近世に於ては、明治維新然り、日清・日露兩戦役の原因然り、満州事変、支那事変、及び大東亜戦争の因て来る事情また然り。而して、最大の困難であった戦争終末の危局は、天皇陛下の聖断によつて、救われたことは、国民のひとしく銘記する所である。

次いで、敗戦直後のわが国の浮沈に拘わる危機は、天皇陛下の御徳によることは、もとよりながら、幸にも、連合国側のリーダーたる米国が、日本に対して、比較的寛容な方針を執ってくれたこと、その後の世界情勢が、所謂東西二大陣営の対立となり、結果的に、一応わが国のために有利に作用したことによつて、切り抜けられた。大東亜戦争に天佑はなかつたといわれるが、これは、天佑であつたとい、得ると思う。

然るに、その後二十余年の今日の状況は、これまで度々の困難に較べて、遙かに、遙かに、深刻な危局であるといわなければならぬ。

世界の情勢を展望すれば、米、ソ、及び中共を濺る情勢の推移は、今後の予断を許さないものがある。しかも、その情勢は、直ちにわが国に降りか、ってくる。世界は、平和を望む声が、充ち充ちているにも拘らず、三国とも、強

大な軍備を擁して、一管相手国の圧伏を企図しているのが現状である。

日本は、幸にして、世界に先がけて、平和憲法と謳歌される国憲に基いて、軍備を禁じ戦争意志さえも放棄し、平和国家の典型を誇示しているが、世界の情勢は、果して、日本の孤高を、いつまで許すかを考えると、甚だ心細いものである。無責任な或る種の政治家は、安易に平和を論ずるが、これが痴人の夢でないと、誰が保障し得るであろうか。戦争が峻烈なものであると同様に、平和も、また生やさしいものではない。非武装中立というようなことが、理想としては、尤もなことであっても、廿世紀から、廿一世紀にかけての、少くとも、数十年に互る現実政治の課題としては、如何に架空のことであるかは、いうまでもないことである。過去数百年、否、それ以上長い人類の歴史が、これを証明している。結局、永久絶対の平和は、人間の力では求め得ないのではなからうか。世に謂う所の人智が進めば進む程、平和は遠ざかるばかりである。人間の本能、国家、民族の欲望がそうさせるのである。現今のような、国家間の深刻な対立関係の下にあっては、如何なる外交家を以てしても、根本的に国交を改善することは、恐らく不可能であろう。

しからは、人類は、今後も永久に戦争を繰り返す外ない

だろうか。平和は、遂に求め得ないのか。

然るに、幸か、不幸か、現代の人智は、地上には、核兵器を現出させ、空には、人間の領域を宇宙にまで拡張するに至り、戦争は、直ちに全人類の絶滅と、地球の荒廃とを招きかねない事態となつた以上、これまでの如くうっかり戦争は出来ないものである。しかし国際間の緊張は、勢の赴くところ、いつ、如何なる事態が起らぬとも限らない。だが、人類も、恐らくそこまで、無智無暴を犯すことは、よもやあるまい。

天に神ありとすれば、神は必ずや、人類の破局を救い給うであろうことを信ずる。

更に、眼を国内に転じてみよう。

現在に於て、国内の危局は、学園の紛争と、国会の混乱と、公害の不可避とを以て代表されているといえよう。

勿論従来から色々憂うるべき事態はあつた。思想問題にせよ、労働問題にせよ、或はまた戦前に於ては最も堅実を以て自他共に信じた軍隊に於てさえ、二・二六事件の如きを起した。しかし、それらは何れも、大局的にみれば、一部にすぎないか、または非智識層に属する現象か、或は特定の変質的素因に発するものであつた。然るに、最近の事態を見るに、最高の学府たる大学の大部が、あの通りの暴力、激斗を繰り返し、これが、更に次の世代を担うべき高

等学校、中等学校の生徒にまで及ばんとしている。戦後の教育は、根本的に反省してみる必要がある。こういう状態は、今後益々拡大し、激化してゆく傾向にある。到底警察力などで抑えられるものではなし、仮に自衛隊が出動したとしても、どうにもなるまい。国家権力の発動にも限度があり、時としては却って逆効果をエスカレートさえするのであろう。政治の貧困を叫ばれている時、現代政治家に、これが收拾を期待することは過望であらうが、假令有能な政治家があつたとしても、これ程の事態を、手際よく処理し、指導することは、不可能に近いであらう。

根本的には、教育の問題に帰するが、現代政治家の頭脳から出る文教政策、さては、現在の大学教授や、日教組の面々に、教育の建て直しを望んでみても無駄であらう。

次に、国会の現状に想到するならば、これはまた、啞然たるものがある。国家の最高機関を以て任じ、国民の選良を以て組織されている筈の国会に於ける智性に欠けた乱斗や、野卑な応酬、それに、政治の母体たる各政党間の醜悪な掛け引き、強引な確執など、国民の不信を買うこと大である。戦前嘗て、政党の腐敗を嘆かれたことがあつたが、今また同じような道を歩いているのではなからうか。

以上のような、学園の暴状にしても、国会の醜態にして、その根源を質せば、世界赤化を企図する共産諸国の魔

手が暗躍していることは否定すべくもあるまい。日本は東西冷戦地といわれるが、今や冷戦どころではない。熱戦近しである。純真だが思慮浅き若者達や、英智に欠けた左翼政治家こそ嘆かわしくも、また憫れなる存在である。日本が世界の発火点にならないことを祈る。

安保問題を目前に控えた今年から、来年にかけての混乱を予想される政界並びに社会一般の動向は、憂慮に堪えないものがある。

次には、公害問題について考えてみるならば学問が発達し、技術が進歩し、経済が発展し、社会生活が幸福になつた筈であるのに、文化の中心を誇る大都市を始め、大気の汚染や、交通の混乱や、病人の増加など、人間は暗い話題で持ち切りである。文化とか、文明とかを誇る反面が、これであるとは皮肉ではないか。

何か、現代人の歩いている道は誤っていると考えないわけにはゆかない。

工業や、交通の発達は、人間の健康を害し生命を脅し、生活様式の近代化は、人間の体力、能力を低下し、機能の進歩は、人間を怠惰にし、また、医学、薬学の発達は、病気を制する一面も勿論あるが、却つて病気を製造し、且つ、案外気づかない間に、人間本来の健康にマイナスの影響を及ぼしていることは、近来、大分反省されてはきたが、ま

だまだ、これに気付かない人が多い。心臓移植や近來流行の献血奨励の如きは、たしかに医学の進歩として、驚異すべきことではあるが、一面現代科学の盲点を衝くものとも考えられ、人間は本来物質とは違う尊厳を保有するという観点からは、問題があるように思う。

兎も角、日本も、世界も容易に解決しそうな難問題が山積しているのであって、廿世紀末の課題は深刻である。

叡智は輝く

以上のように観じてくると、廿世紀を最後として、日本も世界も、滅亡する外ないであろうか。

否々、人類は、それ程愚かではなからうし、第一、神の意志が、それを許すまい。

そこに、叡智の輝く必然がある。

今から十七年前（昭和二十七年）、突如として、一人の女性松木宥子氏の上に叡智が輝いた。爾來、天人女史と称せられる。まことに不思議といえ、不思議である。世に、神秘の現象は必ずしも少くはないが、この一事は全く一寸信じられないことである。しかし、事實は、事實として疑う余地はない。

第二次大戦以後の、世界の動きと、日本の歩みとを顧み、

また、現在の状況を察すれば、全地球表面は、有史以來數千年未だ嘗てない危機に直面していることに気づく。正に世は澆季である。自由、共産両思想の対立、米、ソ、両國を頂点とする東西兩陣營の確執、保守、革新兩政策の激突、それに、人智の暴走による人間社会の混乱と矛盾とは、到底打開の見込みは、なさそうである。それは、取りも直さず、真の平和と幸福とは、望み得ないということに外ならない。結局、人間の智慧と、現代の科学文明とを以てしては、解決がつかないという結論しかない。

このように、興亡の岐路に立たされた人類の上には、神の意志が閃く以外に救済の道はないであろう。神の計らいに基く以外に、生き延びる術はないであろう。

その神の意志なるものは、今や、天人女史という一個の人間を通じて、まさに、澆季に臨まんとする現代に降臨したと感得することは、現に、われわれの眼前に有る事實によつて、決して、迷信でも盲信でもないことを知らされるのである。

それは、現代の人智や、科学よりも遙かに高い次元の問題である。真の叡智とは、こういうことを謂うのであろう。こゝで、天人女史のことを、詳しく語ることは、本稿の主旨ではないが、女史こそは、超人とも、神人合一の人ともいふべき、救世の使命を担われた神の使徒と考えられる

べき存在であろう。そして、現在科学の概念や、既存宗教の常識では、理解し得ない程の一個の人間、それは人間という概念では説明し得ない所謂超人たる女史は、図らずも、日本人として生れた人であったことは、そこに何等かの意義ありと考へざるを得ない。

そのことは、天人女史自からも言明されている所である。尚、ここで明らかにしておくべきことは、「新しい道」に於ける神とは何々教の神、何々神社に祀る神とは全く異り、天の最高神、宇宙真理そのものを謂うという一事である。従つて、この道には、祭壇も祭儀も礼拝、祈禱等の行事もなく、諸々の宗教に於ける神観とは、全く別種のものである。

こういう意味に於て、神道に於ける教会や神社で行われる祈願、祈禱の類と、この道に於て謂う救国の目的とは、明らかに區別して認識しなければならぬ。勿論、天人女史は教祖でもなければ、神官でもない。「新しい道」は宗教ではないのである。

人類史上を顧みれば、幾人かの叡智者を挙げることが出来る。釈迦やキリストは、勿論それであろう。日本に於ては、弘法大師は、正にその人であろう。大師は、支那に渡りヨガの修業を積んだ人のようである。何れも、神人合一の境地に達した人であつたと思われる。

天人女史は、社会的には、無名の一女性に過ぎないが、その神性に至つては、右に挙げたような聖賢以上の人であろうと思う。たゞ、こゝに特筆すべきことは、多くの先人或は、巷間に存在する靈能者や修験者は、恐らく全部といつてもよからうと思うが、厳しい永年の修業の上で完成しているのに反し、天人女史に於ては、社会的には苦難の生活を経て来て居られるようだし、また天啓後は、色々神秘な体験も経て居られるようだが、天啓前に於ては、全く特別な宗教的修業並びに経歴を経て居られない。突如、天啓の道に進まれたということは、全く想像の外である。これには、特別の意義があろうし、説明の必要もあるかも知れないが、それは、この道の経験浅き私の及ぶ所ではないから、触れぬことにする。

思うに、神が天人女史に課した使命は、世界人類の救済に在るのである。そして、その人が、日本に現出したこととは、まず日本国の救済から始めるといふ神の意図に因るものと考えられる。日本人たる女史は、飽くまでも、日本を自覚し、日本を強調し、且、国家を重視されている。国家は、世界の単位であり、世界は、国家から始まる。そして、天人女史のような天啓の人が、恐らく、世界に唯一人、日本人の中に現出したことは、何事かを示唆しているのだと思われるのである。

嘗て、日本には、八紘一宇とか、東西の盟主とかいう語が流行し、その思想が強調された。それは、大東亜戦争の終末と共に、はかなくも、一朝の迷夢と消え去った。戦後は、戦勝国側特にアメリカの政策として、そういう思想は、根底から否定され、日本人もまた、それに同調したが、今にして再び考えてみれば、こういう思想は、必ずしも、間違つたものではないと思う。たゞ、当時は、時流に乗つて、あまりにも端的に、思い上り、また、施策も当を得なかつたために、失敗に帰したのであつた。再び、大東亜戦争の愚は繰り返すべきではないが、日本国の本質と、世界の中で、日本の置かれてゐる地位とについては、謙虚と公正とを以て、よく考えてみる必要がある。

天人女史は、神の意に基いて、そこを強調して居られるのであろう。

やはり、日本は神国である。

日本人たる立場から

欧州文明は、十九世紀から、廿世紀にかけて、輝かしい発展を遂げたが、今や、行く所まで行つた観がある。

ヨーロッパの時代は、既に終つた。今は、アメリカ全盛の時代だが、これも、やがては過ぎ去るであらう。

世は、西洋の時代から、東洋の時代即ち亜細亜文明の時代に移りゆくことは、必至である。そして、東洋に於ては、何といつても日本が中心であることは、世界の常識である。しかし、日本も、うかうかしては行られない。中国は、押しも押されもせぬ東亜の大国である。現在のような共産中国が、今後も永く続くかどうかは、疑問であるにしても、毛沢東治下の現中国は、日本とは、容易に相容れない国柄である。ソ連は、名にし負う欧亜に誇る無気味なる大国であり、わが国とのむづかしい関係は、宿命的である。その野望は、昔も今も、歴然たる所である。また、東亜には、朝鮮や、ベトナムの如き、火薬庫的存在もあり、日本の周囲は、多難である。

日本は、余程しつかりしないと、存在さえも危いといわなければならない。防衛問題が重視される所以である。現代は、昔と違い集団安全保障の時代とはいへ、それも、いつまで、また、どこまで保証されているかは、断言の限りでない。といつて、今はもう、軍備を競う時代ではない。

戦後、平和国家、文化国家を以て任じたわが国としては、経済の発展と、文化の伸暢とを第一とすべきは当然であり、また、その線に向つて努力し、偉大な成果を取め来つたが、その反面、重大なる欠陥を招いた点も、充分反省してみなければならぬのが、現状ではないか。重大なる欠陥とは

何か。それは、物質偏重の弊害と、唯物思想の禍根である。元来、日本民族は、精神的優秀性を特徴とする。然るに、その精神的優秀性即ち、日本の貴重な道徳というものを失った。これを、忘れ去り、捨て去ってしまった。その原因は、明治以来の欧米偏重傾向と戦後アメリカの対日弱体化政策との然らしめる所とはい、ながら、日本人自身の、不覚、不明は、強く反省すべきである。

天村氏も屢述べられている所だが、M R A 運動（道徳再武装と称せられる）といわれるものは、一九三八年（昭和十三年）故ブツクマン博士によって創始された高いイデオロギーに基く一種の平和運動で、近來のように共産勢力の弊害が、世界中に浸透せんとしている折柄、まことに好ましい運動で、これが日本にも普及することは、もとより結構である。しかし、この運動が、戦後日本に導入され、一九六一年（昭和三十六年）小田原市に、その日本に於けるセンターが建設されるや、わが国朝野の名士や学生、青年などが、これこそ、日本の指標であるとばかりに随喜した様は、外国崇拜癖の日本人とはい、ながら、あまりにも、無自覚の感なきを得なかった。

M R A を非難するつもりは少しもないが、日本には、もとから M R A に優るとも劣らない指導精神が、存在していたことは忘れてはならない。たゞ、日本民族は「こと挙げ」

せぬことを美徳とする性情もあり、日本精神は、現実的に割合、展開されていない点があるので、実際問題として、M R A が重宝がられることは、理由のないことではない。外国の文化を取り入れるのは大いによい。日本は昔は主として、支那の文化を取り入れて、大いに発達した。明治以後は、欧米文化を摂取して、よくこれを同化し、今日の隆盛を見るに至った。

しかし、その根本には、日本固有の文化の道徳が、終始に互り太い柱として一貫していたのである。

而して、わが「新しい道」の根幹を為す「神ながらの道」とは、正に、日本精神文化の真髄である。「神ながらの皇室と、皇室を中心とする大和民族即ち日本人、その日本人の有する民族精神、その民族精神の理想は、和であり、平和の精神である。和とは、調和であり、天地融合の大調和であり、世に謂う所の世界平和である。

これが、日本精神の本旨であり、日本文化の真姿である。大東亜戦争も、元来侵略を目的としたものではなかったのだが、昭和の政治家や軍人が不明であったために、その道を誤った。

然るに、敗戦直後、アメリカが執った対日政策は、日本を再び立たしめないうために、徹底的に日本文化を否定し、

破壊し、日本を弱体化することに在った。

所が、昭和二十六年朝鮮戦争が勃発するやアメリカを頂点とする西側諸国と、ソ連を中心とする東側諸国との対立が激化し、アメリカは、その政策を一転して俄かに、当時警察予備隊と称せられた軍備の種子を、日本に植えつけたのである。それ以来、日米は協力して、東側共産勢力の脅威に対抗しているが、共産勢力は、平和攻勢、間接侵略と称せられる方法を以て、着々と資本主義国の崩壊と、日本の滅亡とを目的とする野望を進め、無智なる日本の青少年や、労働者、左翼政党などを巧みに操縦して、日本国内を現在のような混乱状態に陥れている。

戦後、以上のような経過を辿つて、日本国民は、アメリカの強要によつて陥つた、自己喪失状態と、今また、ソ連中共等の謀略に乗せられた混乱状態とを持ち続け、政治その他、あらゆる手段を以てしても、到底救済し難いまでの状態に陥り、それは今後益々激化する傾向に在る。

幸なる哉「新しい道」は現出した。これこそ神の計いというか、天の配剤と考うべきか、日本未だ亡びず、世界未だ亡びずと、聊か、安堵してよいのではないか。

廿一世紀に臨む道

科学の發達は、廿世紀に於て、極点に達した。勿論、今後も、新しい発見、發明或は機械等の性能の向上、社会生活の近代化など、色々な分野で、進歩はするであろう。

宇宙開發などは、漸く緒についたばかりで、その發達は、これからである。決して、科学の進歩は、止つたわけでもなく、また止るべきでもない。

しかし、原子核が解明されるまでに至つた現代科学は、基本的には、一応行く所まで、行き着いたと考えられることは、専門家筋でも、認めているようである。

現に、社会の卑近な所に眼を注いでみても、都市問題や、交通、公害、医療、保健等の政策的問題からその他科学技術に直接関係する事項まで、個々の課題は別として概括的には、行詰りの感は覆われない。即ち人間の智慧は、大体出尽したのである。こゝで、何とか大きく打開しなければ人間社会は、動きのとれないものになってしまうであろう。

それは、現代人が、頭脳智ばかりに頼つて、腹脳智というものを忘れてしまつてゐるからである。現代科学は、頭脳智の所産に外ならない。科学万能の現代は、頭脳智の限

界を示したのである。

元來人間は、頭脳即ち大脳の外に腹脳というものを持っているが、これを知らない人が多い。昔から、肚と称されて、重要視されてはいるが、漠とした言葉なので、解りにくいため、その真義が見逃されている。しかし、この腹脳こそ大問題なのである。

現代科学に育まれた現代人は、物質主義、現実主義に固まっているから、靈的感覺に欠けている。むしろ、頭からこれを否定する人が多い。腹脳は、靈的分野に属するもので、生理学上に於て、そういう機能はない。即ち位置あつて形なきものである。ヨガでいう太陽系神経叢。禪的にいえば、真空妙有の場がそれであろう。勘とか、第六感とかいわれるもの、また潜在意識、靈感、暗示というようなものは、理性にのみ偏した現代人は否定したが、実は、それが最も大切なもので、またそれが人間本来の性能なのである。そのごく低級の程度のもものは、鳥獸魚虫などさえ本能として持っている生物総べての通有性である。

現代科学が、長足の進歩を遂げたのは、大体十九世紀の末頃即ち明治中葉の頃以来であるが、それが更に、今日の如く極度に發達したのは、廿世紀の半即ち第二次大戦以後である。その科学の進歩と歩調を合せて、頭脳智は進んだが、腹脳智は退化し、人間の人間たる、人間性を退化した

ために、現在のよな、混迷の世相を作り出しているのであらうと思われる。

腹脳智が退化しなかつた時代の人は、偉かつたように思う。冷静な思慮と、非凡な判断力、決断力を持っていた。

昔の武將、高僧、明治維新の志士などもそうであらうし、明治天皇は、いうまでもなく、西郷南州、勝海舟、明治の政治家伊藤博文、日露戦役に於ける陸軍の大山巖、海軍の東郷平八郎の如き、国家の安危を担つて、よくその任を全うした人々は、何れも、所謂肚の出来た人であつたらうし、それは即ち、單なる頭脳智だけの人ではなく、腹脳智の優れた人であつたのであらう。

現在、世相の混乱を見るにつけても、今こそ、腹脳智開發、回復の要を痛感する。

元來、日本古來の伝統たる神道即ち惟神の道は、この腹脳智を根底とするものであるし、ヨガは、その行特に冥想を通じて腹脳智の開發を具体的に教える方法として古く印度に發祥した実行哲学である。仏教もまた、印度に興り、支那に渡り、日本にも伝えられて、今も広く普及している救世の道で、根本は、やはり肚を作ること即ち腹脳智開發を修行することに在るであらう。禪は、その具体的方法である。唯残念なことには、ヨガはあまり世に普及して居らず且一般には必ずしも正しく紹介されて居らず、仏教は現

在、葬式仏教と悲口にされる如くに、實質を失い指導性を欠くに至っている。

また、古來精神修養の一つの道として行われている剣道、柔道、吟道、謡曲、歌道、茶道、華道等凡ゆる武道、芸道は勿論のこと、書道、画道、音楽、スポーツ等も、また、その心を以て行えば、何れも腹脳智開発に役立つであろう。そして、これら諸道の真の目的は、何れも、そこに在るといえよう。精神修養とは、帰する所、腹脳の修練に在るのである。思うに、腹脳智を忘れて、頭脳智のみに頼った現代科学文明の終末が、現在の世相である。腹脳智の開顕なくしては、この混乱の世は救済し得ない。腹脳智は即ち、人間の神性である。その神性は大宇宙の神の心即ち天に通ずる。人間が小宇宙といわれる所以である。又神人合一といわれる所以である。

「新しい道」は、人間の腹脳を開発するのが、使命である。この道では、それを臍を磨くと称するが、臍とは、昔からいわれる気海丹田、或は臍下丹田、つまり下腹部の内奥に、無形に内在する部位を謂い、前にも述べたようにヨガ的にいえば、太陽系神経叢、禪的にいえば、真空妙有の場、通俗的にいえば肚であろう。胆力の座であり、また叡智の座である。人間には、目に見える関係の外に霊体というものがあることは、ヨガでも詳しく説明しているが、これは、第四次元に属するものだから、人間の五官の能力で

は認知することが出来ない。腹脳は、その霊体上の一部分であって霊的の力の根源である。そしてそれが下腹部に在ることは、事実である。天人女史は、この臍が、最高に磨かれ、開かれた人であろう。ということとは、即ち腹脳智が開発され、肚の出来上った人ということである。それは既述の如く、自から修養されたのではなく、天の賜として、神から直接授けられた所であろう。そして、女史は、その靈力を人に伝え、世の昏迷を正し、国難を救い、延いて世界に及ぼすべき使命を担って現出した人であろう。

たしかに、現在に於ける情勢は、日本も、世界も、尋常一様の方法では、どうにもならない状態に在ることは、誰の眼にも明らかである。政治も、外交も無力である。教育は、急場の役に立たない。平和的手段も、武力的手段も、強権も、謀略も、効果はない。一体、何を以て、救済せんとするか。神の叡智を待つ以外に道を見出すことは、出来ないであろう。奇しくも、天は、日本人たる天人女史に、その使命を記し給うた。

日本は、自らを正し、而して、世界平和の原動力たるであろう。かくして、廿一世紀に亘り、行き詰れる西洋文明の唯物時代に代り、東洋文明と並細並文化との時代を迎え、廿世紀に築かれた輝かしい科学文化の上に、更に、高次元の文化を加えて、世界平和を実現することこそ、望ましい所である。

(題字・加納如雷氏)

新刊

天人まつき・そうえん女史伝記

矛盾を起す

この異色の伝記は

平凡な一女性の生い立ちから
生きながら天に上昇する迄の
奇しき運命の物語りである
しかし

彼女の盤根錯節の人生とともに
世にも稀れな
神と人間が結ばれる神秘の世界が
手に取る様に描き出されている

上制函入

A 5版

七八五頁

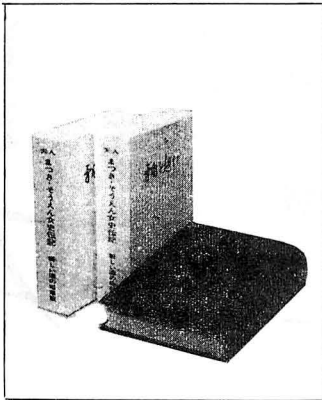
頒価 二、五〇〇円

写真版

二六頁

〒 一二〇円

新しい道センター出版部



大阪府羽曳野市埴生野二九四

新道と日本

|| はじめて本誌を読まれる方

新しくおつながりになつた方のために ||

矢野 誠 一

一、業の渦巻く世界

南海の夜空は美しい。皓々と月は輝き、満天の星は降る如く、南十字星がひとときを輝く。地を覆う草や灌木には、名も知れぬ虫がしぐれるようにすだき、マンゴの木々には、数知れぬ大螢が蝟集して、ネオンさながらに明滅する。突如、地軸を揺るがして敵の砲弾が、間近に炸裂する。轟音が耳を聳し、断末魔の叫びが、耳底を貫いて肺腑を抉る。爆風に四散した無数の螢が空中に乱舞し、地には戦友の屍が月明に浮ぶ。しばし虫が鳴き止んで、島はしじまに沈み、

自分が、まだ生きていることの不思議を、しみじみと思う。大バノラマには、何事もなかったかのように、月は無言に輝き、星は静かに、またたいている。美わしい、悠久の大自然の中で、個人的には何の恨みも、憎しみもない人間同志が殺し合う。怒りとも悲しみともつかぬ激情が、腹の底から込み上げて来て、大声で叫んだ、と筆者の友人は言います。

「人間の馬鹿野郎！」

涙が、滂沱として泥まみれの頬を伝った。

彼が叫んだのは、レイテ島リモン峠日米攻防戦の、そんな状況のさ中だった、とい、ます。

人間は誰しも皆、倖であることを望み、国も世界も平和

であることを願っています。然し、現実に誰もが本當に倅になっているでしょうか。国も世界も真の平和を保っているでしょうか。誰しもそうだとはいきれません。人類は本當の倅せ、真の平和を望みながら、はかない倅に生き、絶えず戦の恐怖に晒されています。

現実の世界は、自我欲に基く対立と鬭争に満ち、いかように口先で平和を唱えても、今でもベトナムでは、依然として泥沼の戦が続き、異国の空で彼と同じ矛盾に悩んでいる多くの人達がいるのです。大国は、一旦自国の利害に關するとなれば、直ちに武力を楯に小国を侵略します。近くはソ連とチェコとの關係にも見られますが、過去に於てもその例は枚挙に遑がありません。そして、小国が、いくら原水爆の製造、実験の禁止を訴えても、大国は恬として耳を貸そうとはしません。平和を維持するためには、核兵器を保有するより外にない、と大国は思っているからでしょう。

このような危険極まるものを競って製造して行けば、將來も絶対使われないとは誰も断言出来ません。古くは原始時代からの楯、槍、弓矢、近代に入っては、小銃、機関銃、大砲、戦車、軍艦、飛行機、細菌、原子爆弾等、未だ曾て、使うために造られた武器で使われなかったものはないことから考えると、敢て杞憂だとのみは言いきれないのです。

只、今度の場合は、一瞬全世界が壊滅するというしろものだけに、その場その場を糊塗して、何とか微妙な平和を保っているに過ぎません。

或る人はこういうかも知れません。国と雖も結局は人である。肺肝を披瀝して話し合えば、必ず平和を維持する方途はある、と。然し、例えば、自分の方は兵器を捨てるからお前の方も捨てろと言つて、猜疑に満ちた相手が、素直にそれを信じて捨てるでしょうか。若し、一方が本當に捨てたと分つたら、他方は忽ち餓狼の如く襲いかゝるでしょう。それならば、お互に兵器を捨てないで話し合うより他に途はなくなりません。お互に猜疑と憎悪を内に抱き、核兵器製造の優位を競い合いながら話しあうことに、果してどれだけの意味があるでしょう。ベトナム問題では、和平交渉合意から一年、その間何回も会議を重ねているのに、最近に至つては、米軍戦死者の記録は、朝鮮戦争のそれを越え、しかも、その三分の一は、和平交渉合意から一年間のものだというのですから、皮肉なものです。人類の業というものは、そのようなことで霧消するほど底の浅いものではありません。大国と雖も好んで核兵器を製造しているとは考えられません。寧ろ造り度くはないでしょう。それにも拘らず、造らずにはいられない。それを業と言わずして何でしょうか。

核兵器によって世界の国々の生殺与奪の権を握り、自我欲に満ちて対立している大国に世界の運命を委ね、人類の本当の倖、平和を期待することなど、百年河清を待つに等しい、と言わねばなりません。小国と雖も同じことで、自国だけが無事平穩であればよい、と思つてゐることに変わりはありません。

(註) この道では、天の摂理に逆いた、人間の天に對する借を言います。

二、日本よ、何処へ行く

日本は核兵器保有国の暗い谷間にあります。現在の日本の一部の人達は、自分達が国のことを考えたところでしょうか、しようもない、という所から、自分とその家族だけの生活を考え、自分達がマイホームに安住出来れば、国がどうなるかが、米国の庇護の下にあらうが、ソ連や中国の庇護の下にあらうが、そんなことはどうでもよい、といった境地に満足を見出します。

一部の人達は、米國に、或は、ソ連や中国に加担しなければならぬ、いや、中立でなければならぬと主張し、且つ、それを実行に移してゐます。こうした人達の中に

は、真実國を憂へてゐる人があるのは事実ですが、米國側に組し、ソ連や中国に敵對してゐて、真に日本が救われるでしょうか。反對に、ソ連や中国に味方して、米國の戦力を日本から駆逐出来るでしょうか。或は米、中、ソ何れにも味方せず、中立を守つて日本が生きて行けるでしょうか。誰しも確信ある回答は出来なないでしょう。

日本が生きて行く上に於て、こういった問題を、ただ相對的なイデオロギーを基に、現象面だけから、何らかの手段方法により解決しようとした所で、世界の業の渦中空転するだけで、空しい努力に終るでしょう。逆に、この小さな國が、米國的日本、ソ連的の日本、中国的日本等に四分五裂、否、それ以上に分裂して同胞相對立し、いがみ合い、憎みあい、傷つき合わねばならない悲しい事態に陥つて、收拾がつかなくなるのが落ちです。

現に学生運動に於てその兆の姿を見せつけられています。教育界のみならず、言論、思想、政治、經濟、宗教何れの世界を見ても矛盾に満ち、これ等を貫いてゐる主潮は、名目上はともかく、實際には、醜い自我欲や、無責任や、自惚れや、虚栄がもとで、顧みて他を言う風潮から生れる對立と鬭争です。單なるイズムや現象面だけからの解決が不可能なことは、世界も日本も何ら變りはありません。日本も、世界と同じく積年の業の渦中にあるのです。

私達は、大きく世界のことを云々する前に、日本人としてどうあるべきかを問題にしなければなりません。これは、日本さえ良ければ、世界のことなどどうでもよいという偏狭な考えで言っているではありません。顧みて他を言っているのは、物事は何も解決しないからです。それには先ず、人類社会が、どうしてこのような状態になって来たかの、その根本原因を明らかにしなければなりません。現象というものは、現われて来た姿です。現われて来るには、現われて来るだけの、現われる以前の、目に見えない原因というものがあります。この原因から正してゆかない限り、現われて来た姿だけをいじくって見ても、どうにもならないのです。

三、世界混迷の原因は何か

今日人類は、十億分の一秒単位の演算速度を持つコンピュータを駆使して月世界に人間宇宙船を打ち上げるまでに、物質文明の華を咲かせました。約百年近くも前に、ジュールベルヌの夢見た空想の世界は、最早現実のものとなっているのです。ですから、科学は無限に進歩する可能性を持つと信じ、そこに人類幸福の夢を託し、凡ての問題は科学によって説明される、と信じている人もいます。

なるほど科学の進歩発達によって、私達は色々の面で多くの便益を受けているのも事実ですが、人間は、果してそれだけで倅になったでしょうか。科学の発達には核兵器を生み出し、人類は全滅の危機に晒されて生きているのが、現在只今です。これは、明らかに科学だけでは人間は倅にならないことの証左です。科学兵器に限らず、自動車事故にしろ、騒音、汚水、粉塵、媒煙等の公害にしろ、農薬の被害にしろ、人間は、自らの造り出した、科学の成果に、逆に悩んでいるのです。公害喘息に苦しんで、遂に自殺した市長もあることは、皆さんもご承知の通りです。

科学は人間の智慧によって進歩発達します。その智慧の使用は、天から人間に自由として与えられたものです。智慧は、これを乱用すれば、その与えてくれた天の存在も、自らの实在性も否定することが出来るほどに自由です。ですから、人間は、智慧によってどんなことでも知ることが出来るし、又、どんなことでも出来る、と錯覚する人も出て来ます。然し、人間は、智慧だけで何でも凡てが分る訳ではありません。又、智慧によってどんなことでも出来るという訳のものでもありません。人間は、蜻蛉一匹、蟻一匹さえつくることは出来ないのです。

智慧も天の与えてくれたものですから、必要がないというわけではありません。手近な話が、智慧によらなければ、

こうしてこの道をお知り頂くことも出来ません。科学的に物事を考えるということも必要ですが、あまりにも智慧に重きを置く人は、科学的に説明がつけば認め、説明のつかないことは、事実を事実として認めず、否定したり、不用意に捨て去ってしまったりする癖があります。処が、人生には、智慧で分らないことの方が実に多いのです。智慧で納得出来ないからつまらない、というのは、事実にそぐわないことで、逆に智慧で納得出来る位のことには、寧ろ大したことはない、とさえも言えるのではないかと思ひます。

人生を支配しているものは、科学的に説明のつかない、智慧を超えたものなのです。私達は、事実として素直な気持ちで受け取り、事実の前には謙虚であろうとする態度が大切だと思ひます。そういう科学者もいます。エディントンは、「物質科学者は、陰影の世界を弄ぶものである」と言ひ、ジーンズは、「知識の流れは、非機械的実在へと向つている。宇宙は、大きな機械というよりも、一つの偉大な思想のように見られるようになった」と、言っているからです。

今日人類社会が、現在のような様相を呈するに至つた根本原因は、積年の人類の業にあるのですが、その最たるものは、人類が長い間、そのみたまを生んでくれたものと一つの本源を忘れ、智慧を乱用して来たこと、特に日本人が、

その本質を見失ひ、日本人としての、本来の生き方を忘れてしまつたことにあるのだそうです。

それならば、人類のみたまを生んでくれた、もと一つの本源とは何か、日本人の本質とは何か、日本人として本来の生き方とはどういふことか、ということが明らかにされなければなりません。

四、日本根の国、底の国

こゝで思いをいたされるのは、日本が敗戦とともに、新憲法によつて戦争を放棄させられたことです。放棄させられたとは言ふものゝ、若し新憲法がなかつたら、或は日本も、核兵器を製造して、世界の原水爆製造競争の列に加わつていたかも知れません。強制されたとは言ふものゝ、なつて来た姿です。日本は丸裸なるが故に、丸裸のものこそ先ず救われるということ、世界に証さねばならない立場に、自然に置かしめられた、というふうな受け取る事が出来ないでしようか。

日本という国の名は、日の本、陽の本、光の本ということであり、日本という国が、日出づる国であることを示しています。又、霊の本ということでもあるので、霊（みたま）のもとが出現される国である、ということをも暗示し

ています。日本の国は又、四季島の国とも謂い、本来四季のけじめがはっきりした、世界の中心となるべき国です。

近年の四季の乱れは、日本の乱れ、世界の中心の乱れを象徴しています。更には、大和（弥的）の国とも謂い、天が弥が上にもめつこを入れて、手塩にかけた、世界で一番目標となるべき国です。

この道では、日本根の国、底の国と謂います。日本という国は、世界の根、底に相当する国であり、国そのものにも根があり、底があるのだそうです。根の国、底の国というのは、今一つには、国民が、自らの根であり、底である。またま通りに生きるべき国であることを意味しています。植物は、地下で根が営々として働いているから、枝や幹は栄えますが、根が枯れ、ば、枝や幹は遠からずして枯れます。世界が平和になり、良くなるためには、根の役目がある日本が先ず良くならなければなりません。それだけに、日本という国の責任は重いと言えましょう。その日本が、有史以来のたった一度の敗戦により、米国の占領政策に幻惑されて、一切の伝統や因習をかなぐり捨て、外国の模倣追従にこれつとめて来たのです。

日本が根としての役目を果すのは、外国と同じように、乃至は、それを凌ぐ物質文明の国になることではなく、日本人が、日本人としての本質に目覚め、日本人としてのの、

本来の生き方をする、ということではなればなりません。

そうして、太平洋戦争に、ウォーナー博士の進言によって、京都、奈良が爆撃を免れたように、核兵器を持つ大国が、核兵器のない日本は良い国だ、うらやましい国だ、日本という国は、どうしても潰せない、自分達の国も、日本のようになりたいと思うような、弥的の国になる以外にありません。その昔、シユペングレーが「西洋の没落」と言ったことの裏は、我達日本人の立場から言えば、日本という国が、このようになることでなければなりませんし、キップリングが、「ともに相合うことあらじ」と歌った、西と東は、こういう形に於てのみ、真に相合うことが出来るのだ、と云えるでしょう。奈良や京都には、外国を凌ぐ近代的な、建造物や美術品があった訳ではありません。若し、京都や奈良が、そのような町であつたら、既に灰燼に帰していたでしょう。

外国が日本に求めるもの、それは、外国にないもの、本當の日本独自のよきでなければなりません。日本は、今日一人当りの所得を措くとすれば、国民総生産の絶対額では、世界第二位と言われていますが、反面、外国では、安全保障を他国に依存していて、己だけが経済国家として繁栄し、金を儲け、生活を楽しんでいる。それだけでは、エコノミックアニマル（経済的動物）ではないか、と皮肉ついている

のは、ご承知の通りです。下世話に言えば、他人の褌で相撲をとっておきながら、何を自慢しているんだ、恥かしいと思え、と言われているのも同じです。日本が世界の中で果す役割、それは、単に経済国家として発展することだけでもないことは、これによっても明らかです。

曾ては乙旗を掲げた朦朧に守られていた四方の海に、外国の艦隊が常時遊弋する現在です。イズムや現象面だけからの解決に希望が持てないとすれば、今日のような時にこそ、国の名にふさわしい眞の信仰が、日本に起るべくして起るべきです。裸同然の日本に残された救済の道は、私達日本人が、先ず業を払拭し、天に帰一する外はありません。そして、天に帰一するには、どうしても、日本人は、日本人としての本質に目覚め、その本質を生かした、日本人としての本来の生き方をしなければならぬというのが、この道です。

五、人類の帰一すべき神とは

MRAの提唱者ブックマン博士は、『世界は神に導かれる人によって導かれなければならない。世界を挙げて神に委ねようではないか』と、言っています。誠にむべなるかな、と思われるのです。

処が、ここに一つ問題があります。ご承知のように、日本には、古来八百万やおよぼうずと謂われる位、沢山の神々があります。これに外国の神々を加えますと、その数は実に夥しいもので、高きは神界に属するものから、低きは動物霊に到るまで、実に様々です。尤も、中には同神異名のもものもあります。そして、それらの中には、他人を呪咀する願いを聞き入れる神さえもあります。ブックマン博士の言う神とは、どのような神なのか、明らかではありませんが、世界の平和のために、挙げて委ねようではないかと言う以上、その神はどういう神かが、はっきりしていて、どの個人も、民族も、共通に導かれることのできる、同じ神でなければなりません。どの個人も、民族も、帰一することのできる神それは、唯一絶対完全のものでなければなりません。そういう神を、この道では天と申します。

この物質宇宙が出来るまで以前、影も形もない悠久の太古、一大生命である天のご意志が発動して出来た、ポツンとした一点―人類のみたまを生み、神々を統べ、万有を成らしめたこの原点(中心)を、この道では「種」(多根)と言い、その人格的表現を、たねのみこと、と申します。謂わば、天の臍です。

これまで、天が神々を使いとしたのだそうですが、神々の中には、その使いとしての役目を果さず、背いたもの

も沢山ありました。私達は、神々の世界と言えば、争いのない、うるわしい、平和な世界を想像しますが、必ずしもそうではなく、善神もあれば、悪神もあって、神々によっては、その対立や闘争の關係は、人間世界と少しも變りはありません。目に見えない、そういう神々の世界が、現世と謂われる地上の世界にも、反映して来ていたのです。そうした神々ではなく、天が、ぢかに人間に働きかけ、これを差配する時が、人類史上初めて到来したのです、これをこの道では世直り、と言っています。

今の世を、正に末世とも、末法の世とも言うのだそうですが、私達人間が考えても好ましくないと思う今の世相を、人類を生んだ親なる天が、よしとする道理がありません。悠遠の古から丹精込めて天が育て、来た、地球や人類が、業の自壞作用によって自滅しようとしているのを、黙って傍観している道理がありません。必ずや、天が末法の世の人類に、かくあれかしと望む所の意図があるはずで、然し、いくら天に意図があつても、天には口がありません。若し、天がその意図を人間に直々伝えようと欲するならば、人の口を以てする以外に方法はなりません。

六、新しい道とは

若し、キリストや釈迦が、肉体を持って日本に再臨したとしたら、恐らく世界のキリスト教徒、仏教徒達は、一目見ようと、万里の道も遠しとせず、日本にやつて来るでしょう。

人間は一旦特定の門や、派の枠内に入ってしまうと、なかなか、その枠から抜け出て、自分を客観的に眺めるといふことが、出来にくくなります。やどかになが、自分の殺を、外から眺め得なくなるのと似ています。現在、日本に釈迦、キリストを超えるお方が既に出現しておられる、と言つても、一般には、なかなか素直に、おいそれとは、信じて貰えないでしょう。

松本草垣女史、このお方お一人によって新たに開かれた信仰の道を、新しい道と申します。この道は、信仰の道ではありませんが、従来の伽藍、殿堂、儀式を重んずる、所謂既成宗教とは趣を異にしています。又、この道は、天の意図によって計画され、起るべくして起つた、人間としての立場から言うと、自然に成つて来た道で、人間の智慧、才覚や、所謂神様によって出来たものではありません。

何故新しい道といふのか、と申しますと、世間一般の方

が、未だお聞きになったことのない、その実、この国の最も古い教えを、こと新たに説く道だからです。

そして、個人も、国も、このまゝ、行くとどうなるか、これから先の世の中は、どうあるのが本当か、という先行きの目標と、本当の信仰は何を目指すべきか、というその目標を教える道です。

人類に対する神仏の教えは、キリスト教、仏教を初め、実に数多くのものがありますが、この道の教えは、それらの凡てを包含し、しかも、それらを超える、人類に対する、最高終局の教えです。これは、別段、手前味噌で言うのではありません。それだけに、どこにも類のない、従つて、他と比べようのない、天の折紙つきの道であり、金の草鞋を履いて探し求めても、それだけの値のある、只一つの最も有難い道です。

こう言えば、すぐに異論があるでしょう。山に登るには、道は幾つもある、極める頂上は一つだ、と。これは、よく使われる譬喩で、一見尤もらしく聞えますが、場合によっては、適切ではありません。山の頂上を極めることが、凡てである場合には、この譬喩論も成り立ちますが、そうでない場合には、逆に詭弁にもなりかねません。

この道の目指す所は、山の頂上はもとより、併せて千尋の海です。海山なのです。山は、ヒマラヤのようにいくら

高くても、天氣が良ければ見えもするし、登ることも出来ますが、海の底は見えませぬし、計り知れませぬ。又、海の真砂は、数えることが出来ませぬ。限りない山海の珍珠を饗応して頂けるのが、この道です。

新しい道という名称を打ち出したのは、昭和三十一年で、現在大阪の南郊羽曳野の里にその本拠があります。

七、地上の天、松本草垣女史

松本草垣女史は、天とは、天の在り方とは、天の人類に対する意図とは、かくの如きものである、ということをも、身ぐるみ、身を挺してお示し下さる宿命を持つてお生れになった方です。人類のみたまを生み、神々を統べ、万有をならしめた、天の躰なる種そのものが、今日あるを期して、天にあるとともに地に落ち、けし粒よりもまだ小さく、潜んでその躰裡にあつた方なのです。

そういう方が、女性で二十人位あつたそうですが、たつたお一人、女史だけが、幸か不幸か、天のめつこに叶つて、天の篩に残られたのだそうです。このことを、女史は、人としての立場から『私は天に上ま上げられた、天から引っかけられた』とも、又、『私は天の仕組みの罫にかつて、榨木にかけられた』とも、更には『天のほりものにさ

れた』とも申されるのです。

明治三十四年、後に横須賀市助役となられた故安東天涯先生の、ご息女としてこの世に生を享けられ、普通の家庭人としてお育ちになった女史は、まさか、ご自分が、そのような宿命をお持ちになつていようとは、十年余り前までは夢、お分りになりませんでした。六十七才の今日まで、ご夫君、松木天村先生と、ご息女と、三つ巴となつて歩んで来られた道すがらは、天理教祖を初め、その他諸々の教祖と言われる方々を凌ぐ、俊烈苛酷な、蕪苦勞の連続でありました。左に掲げる、昭和二十七年十二月二十九日の、女史のご手記により、その一端を伺うよすがとさせて頂きます。

『神様が何と申されても、あまりにもきつい過去、現在この草垣には堪えかねる。次に書くことを、神、聞こしめせ。第一に金、次に家、次に娘、次に世の中、あまたあまた。これが草垣の悩みとなる。人間草垣は石ではない。食べ度い、着たいは当然である。それを神が徹頭徹尾指図する。それは、人間には出来ない相談である。よくもまあ、と思うほど。たゞ苦しいのは、今の世に、あまりにも出来にくいことが多い。針が持たれぬ。人にたのむに金はなし一枚の布子を持つても、目がなやむ。眼鏡が買えぬ故。出るべし、出るべし、と神はせき込む。西へ行つても、東へ

行つても、乗物の要る今の世である。これを神は知り給わず。然るに、あまりにも慘酷である。縫わしてくれぬ神が残念。重ね着せよ、と神は言う。重ね着するにも重ねられぬ。十二単衣(註二)を神がす、める。昔と今をしろしめせ。縫わしてもらえば震えぬけれど、これでは寒さにも耐えかねる。正月十日が山であるとや。何の山かは知らねども、神も無情じゃ。草垣も人間であるほどに、許せ、天燈虫(註三)というその矛盾。人間草垣に返し給えや』

ほうずきの実を指先で忍耐強く揉んでいると、ポツンとした口が裂けずに中味が出て、女史の口の中で音を出すように、私達の見える物質としての臍の奥に鎮座するみたまなるものが、苦勞によつて揉まれに揉まれると、それが音(声)となつて、肺の呼吸による音と、口を通して噴き出るようになるのだそ です。女史は前末路のご苦勞により、そのようになられた最初のお方で、しかも、女史の場合は、そのみたまなるものが、天がその意図により、自らを地に落(註四)していた種そのものであったのです。『へそのないもの一人もない。へそがもの申す』、そういう時代が、とうとうやつて来たのです。その最初の雛型が女史なのです。女史は、昭和二十七年にそのような状態になられて以来今日まで、一切を、最初は得体の知れなかつた、ご自分の

みたまの聲に任せて、その催促するまゝ、追い廻すまゝに、自分というものを置きざりにして、寸毫の呵嘖もないその要請通りに、言い換えれば、天の摂理通りに、生きざるを得なくなつてしまわれたのです。思うことの自由は天から人間に与えられたものですが、その思いさえも、天の摂理に叶わないことは、一切お持ちになれなくなつたのです。

そうして、女史をさんざん苦しめ抜いた挙句、数年を経て初めて、女史のみたまが人類のみたまを生んだものと、一つの親であること、即ち天であること、女史の歩んで来られた道すがらは、天の摂理通りであつたことを、女史のみたま自身が、女史の知性に明かにしたのです。

筆者が曾て女史に、キリストが最後に残したと言われる言葉『エリ・エリ・ラマ・サバクタン』について、一言お尋ねしたいと思つて、その言葉を口から出した時でした。瞬間、女史は筆者の言を遮られ、『その言葉を口にするのではない。キリストは、お前の言つた、その言葉を聞いて、今、胸痛んでいる』と申されて、それ以上そのことについて触れるのを、止められたことがあります。キリストと通じられるさゝえの瞬時です。

皆さんご承知の、あれほどのご苦勞をなされた天理教祖は、『わてはこのお方にはかなわん』と、女史を姉上として敬慕され、いつも、女史のみたまとともにあつて、女史

にご加勢なされていますが、曾てある外部の有徳の氏が、特に許されて修行の場に参列された時、行事が終ると同時に、柏手を打つて女史を拝まれたので、その訳を尋ねると、女史の後に、はつきりと、天理教祖のお姿を拝したからです、とのことでした。

まだこの道の者さえも、女史がそういうお方であるということを知らなかつた頃、二人の巫女を連れた、白髪の老人が、女史を訪れた時のこと、女史が、『もうすこし前へお寄りなさい』と申されても、『いや、本日私は、親様にお会いすることができまして、ただもうそれだけで勿体のうございます』と言つて、一間程距て、どうしても、それより前へ進まれなかつた、ということもあつたそうです。女史の手を拝見しますと、縦の筋が、掌から中指のつぺんまで、両方とも真直ぐに通つています。

これに類することは、まだ他にも色々ありますが、皆さんは、これらの事実を、女史のみたまが、私達人類のみたまの親であるということと思ひ合わせて、どうお考えになるでしょうか。

(註一) 天の意図通りに彫り刻まれたもの、天の掘り出しもの、天によって地に放り出されたもの等の意。

(註二) 寒ければ浴衣を重ね着せよとの意。

(註三) 天灯無私―女史がご自分を無にしてそのみたま

を明かにされることが同時に即、天を明（証）
かすことであつたことを意味します。

（註四）みたまのことを單的に「へそ」とも言います。

八、業は取れる

この道には『これ程苦勞をした女は世界に二人とない』
という、女史のご苦勞を天が証した言葉があります。それ
ほどの、万苦のみそぎにより、ご自身のみたまを開顕され、
それが人類のみたまの親であるとともに、更には、造化の
神であることを明かされたことによつて、種の段階から根
の段階へとお進みになつたのです。天が見込んだ、類稀な
女史の性根によつて、種から根が現われたのです。植物は
種から根が出て芽が出ると、種は、その形相を減しますが、
天なる種は、依然、種として光芒を発しつつ、根を顕にし
たのです。天理教祖がお筆先に残された「根が現われたら
恐れ入るぞや」というのは、この事實を指して言うのです。
この道の教えを、根の教えとも言う所以です。

このことは、ご自分のみたまが天であると同時に、万劫
の古から今日まで、人類と万有を育て、人類のために尽し
て来てくれた天そのもの、忍苦が、如何なるものであつた
かを、俗世間内にあつて、生身の肉体をもつた儘で、明かされ

たことにもなる、と思わせて頂けるのです。ですから、不
思議なことですが、女史の場合は、ご自分のみたまを明か
すことが、同時に天を明（証）かす、天に灯をともしること
であつたのです。天から言えば、未だ人類に知られていな
かつた自らの面を、女史によつて人類に明かした、とも言
えましよう。天に帰一すること、女史に帰一することは
その意味に於て、一つなのです。

こんなふうに言いますと、或は、それは独善も甚だしい、
と反論される方があられるかも知れません。そして、例えば、
こう言われるでしょう。万有一切は天ならざるはない。天
は宇宙に遍満している。自然は親である。どんな道であろ
うと、修行次第で深夜静かに打坐すれば、万象は心眼に映
じ来り、天来の声を聞くことが出来る。大道は無門である。
どうして一女性の体の中だけが天であろうと。一応ご尤
もですが、そこには自ら限度というものがあり、天直かの
深甚な意図は、女史のような道すがらを歩まれた方であつ
てこそ、又、女史のような因縁のみたまの持ち主であつて
こそ、はじめて知り得ることではないか、と思わせて頂く
次第です。

かくて、地に落ちた天なる種は、靈の本、根の国、日本
に、根を据えたのです。女史が、満一才を迎えられるまで
に、ご母堂の胸に抱かれ、父君の勤務地を訪ねて、南は台

湾から北は北海道まで旅されたこと、このこととの間に、不思議な暗合を感じさせて頂くのです。日本という国は、この事実があるから有難いのです。これによって、この末法の世に生きなければならぬ私達の身の因果、即上因縁となる機縁が、私達に与えられたのです。

松は、盤根錯節を成して岩をも貫き、竹は、節毎に芽生えて丈を伸ばし、梅は、風雪に耐えて暗光浮動する。その通られた道すがらと、因縁を果しきられ、磨き上げられた人品風格は、まこと歳寒の三友に譬うべく、現在、人間本来かくあるべし、という天の意図通りの、人間の雛型、日本人如何に生くべきかの、典型、理想像として完成せられたのです。と同時に、みそぎによって、今は単なる外見丈の肉体の衣をまとった天として、しかも、平凡の裡に、混迷の日本を救済すべく、ご自身のみたまより直に湧き出る絶対の音（声）によって、人智では曲げることの出来ない、天の摂理を、夜毎にお説き下さっているのです。そうして、この道につながった人々の業を払拭して、女史の手足となる、世直り、国助けの選ばれた千人の要人をご養成下さっているのです。古来謂う所の弥勒（三六九）の下生なるものがあるとするれば、既に末法の世である現在、このお方を措いて外にあるうとは考えられないのです。私達は、いじけた、ひねくれた小智や、自我を捨て、この事実の前に

謙虚であらねばならない、と思えます。

さきに、この道の教えは、世間一般の方が、末だお聞きになつたことのない教えだとも、山はもとより、限りない海の教えだとも言いましたが、それは又、土に隠れて目に見えない根の教えだとも言えます。根の教えということとは又、天の母なる面の教えに對し、父なる面の教えだ、とも言うことが出来ます。更に又、昼に對しては、夜の教え、日に對しては、月の教えとも言えます。人類は、長い歴史の年代に亘り、多くの聖賢が説かれた、母なる教えによって、今日まで育成されて来ましたが、最早、そういった母の教えではなく、父の教えによらなければ、救われなくなつて来たのです。それは、恰も家庭に於て、親が子供の養育に當つて手が負えなくなつて来ると、父親が代つて、きびしく訓育するのと一つです。

ここで、一つ大事なことは、既にお分り頂けたかと思いますが、女史が、その口を通して天の摂理をお説き下さっているのは、決して天のお告げではない、ということですが、ご自身の歩んで来られた過去の筋道、思い、を即、天の摂理としてお示し下さっているのです、ご自身の実行しておられないこと、即ち、ご自分のものではないことは、何一つ申しておられない、ということですが、その意味で、女史は、神靈、人靈、乃至は動物靈の憑依した所謂靈能者とは、類を異に

しておられるのです。女史は、所謂トランス状態や、これに類した状態に於てではなく、明るい所でも、はっきりとした自意識の下に、時には、自らのみたまより湧き出る言葉に、自らも感じ入りつゝ、語られるのです。

世が業の自壊作用によつて崩れようとしているならば、その原因となつている業をなくすることが出来るならば、これに越したことはありません。然し、業というものは、一般に取れない、それあるが故に、輪廻転生を繰り返す、と言われている位、根の深いものです。人にもよるでしょうが、前生、今生に積んだ業は、私達凡俗の徒は、自分一人では、なかなか、取りきれものではありません。

天は、女史によつて、先ず日本人から業を捨てることの出来る、無くすことの出来る、最高に有難い場所を、しつらえて下さつたのです。業が取れるということは、何よりの徳なのです。

それは、女史のみたまが、天であり、生涯をかけて、ご自分の身をお削ぎ下さつたが故に、お出来になるのです。ですから、女史は、ご自分のことを、世にも不思議な「業取り女」だと申されるのです。そして、女史によつて出来たこの道の場合を、「因縁の果し場」と言うのです。業を取るといふようなことが、仮にも、徒や疎そかに言えることかどうか、ということに思いを致して頂ければ、と思ひ

ます。(詳しくは、女史の伝記、菅原茂次郎編「矛盾を超えて」をご参照下さい。)

(註一) 身を削ぐこと。

九、道と、松木天村先生

女史について語る場合、同時にお知り頂かねばならないのは、ご夫君、松木天村先生のことです。女史の半生以上は、裏を返せば、先生のそれだからです。

先生は、明治二十五年、南国土佐は須崎に呱呱の声をあげられました。日清戦争の勃発に先立つこと二年前、文明開化の日本に、最初の大試練が訪れようとする頃でした。

少年期を迎えられた頃、既に先生の胸裡に鮮烈な印象を与え、先生を強く感化していたものは、新日本生誕のために、身を惜しまず、動乱の幕末に奔走した、郷土の英傑、坂本龍馬の憂国の至情と、大富豪を夢み、世界の富を掌中に収めようとした、同じ郷土の傑物、三菱の祖、岩崎弥太郎の進取の気概でした。

日毎、茫洋たる太平洋を望み、自ら養われた浩然、剛放の気は、絶えず脳裡を去来する、二人の先達への掲仰憧憬と相俟つて、多感な少年、天村先生を片田舎、須崎の小天

地に踰躅せしめてはおきませんでした。青雲の志止み難く、日本が、漸く世界の列強に伍して、華やかに国際社会の檯舞台に登場し始めた頃、即ち、日露戦争後数年を経て、赤手、空拳、東西も分らぬ大東京へ勇躍独行して、その渦中に身を投じられたのです。

進取の志あくまで偉大に、不撓不屈の精神に燃える先生は、無縁無故の大都会の直中であつて、夜を日について、学び働き、働き且つ学び、勤勉力行すること十幾星霜、漸くにして自らの道を拓き、一個の社会人としての地歩を固められたのでした。

二十八才の春、当時横浜高女を卒えられたばかりの十九才の、可憐楚楚たる草垣女史と結婚され、まどらかな家庭生活を営まれたのですが、人の世の宿命は定め難く、数年を出でずして起つた関東大震災によって、粒々辛苦の甲斐も空しく、一瞬にして、凡ては烏有に帰し去つたのです。

然し、あくまで牢固たる初発心を堅持される先生は、いち早く灰燼の中から立ち上り、起死回生の新天地を関西に求められたのでした。が、まさか、この時既に、天の仕組みによる生涯を運命づけられていようとは、夢想だにされなかつたのでした。爾来、先生の手がけられることは、悉く志に反し、蹉跌につぐ蹉跌の連続で、所謂七転八起の蕪の道を辿られなければなりません。先生ご自身の堅

忍不拔の精神もさることながら、その蔭には、生来病の巢と言われる位に、蒲柳の質でありながらも、貞淑至らざるなき妻として、又、子の母として、世の模範となり、弟妹や隣人から深く敬愛せられ、親しまれ、信頼せられた女史の明るい支えがあつたことを特筆せねばなりません。

やがて、祖国日本の敗戦と運命を同じくして、先生は、甚しい精神的虚脱に見舞われ、苦悶の果てに、五十年顧みて愚か寒苦鳥の一句を遺し、自決の場を武蔵野に求めて、櫟林を彷徨されたこともあつたのでした。

天が人をして偉業を成さしめようとする時、その全てを剝奪し、千仞の谷に落とすと言います。ご夫妻もその例に洩れず、人生最悪の環境に陥られ、悩み、且つ、苦しまれたのですが、そのどん底の苦裡にあつて、外扶内助至らざるはなかつた、夫人草垣女史の身に、先にも記した、思いもよらぬ不思議が起つたのです。

『この女を生きながら神の座に据えしぞ』との声が、女史の腹中から噴き出して来たのでした。爾来、ご夫妻、ご息女と、最初は正体の知れなかつたその声との間に、昼夜を別たぬ交渉が始まり、それによつて、この世ならぬ不思議の数々の中に、筆舌に尽し難い練獄の仕込みを、三つ巴となつてお享けになられたのです。

そうして数年、『よくぞ堪えたり、天は愛づる。天村よ、妻は玉となった。今日より天人と呼ばす。この道を新しい道という』との祝福を受け、こゝに、先生は、絶対の信を持って立ち上られ、現在、この道の旗持ちとして活躍しておられるのです。

先生と女史の性格が、恰も開いたコンパスの如く、やむにやめずに国を思うという一点に於てのみ相合し、他は凡てに於て異っておられる所に、奇しき因縁を思わせて頂くのです。先生なくして今日の女史なく、女史なくして今日の先生も亦、あり得ないのです。

この道では、夫は天、妻は地と言います。女史の、先生を天とし、ご自分を地としておられることは、昔も今も、少しも変りはありません。この道は、天地合体の道であり、夫婦揃ってでなくては通れないのです。

(天村先生についても、詳しくは、前掲着書「矛盾を起えて」をご参照下さい。)

十、みたまは天からの分れである

私達には、見える臍の内裏にみたまというものがあり、また世には、みたまなるもの、存在を否定する教えもあり

ますが、たとえこれを認めて、一霊四魂ということをおっしゃるにしても、それがどこにあるか、ということはお明らかにはありません。ヨガでは、太陽叢という神経叢(チヤクラ)がへそにあるということは言っていますが、神経叢は咽喉にも、胸にも、その他にもあつて、太陽叢が他の神経叢に比べて、特に優位にあるとも、みたまとも言つてはおりません。又、真空妙有ということをお申される方もありますが、その場がどこにあるかということは、言つてはおられません。

この道では、はっきりと、それは、見える物質としての臍の内裏にあつて、それこそが、日本人の本質であり、本当の自分自身であり、中心である、と言います。私達にあつては、みたまが、自らの原点なのです。凡そ中心のないものはありません。家庭には主人、学校には校長、会社には社長、国には君主、若くは大統領、原子には原子核、太陽系には太陽というふうに、夫々中心があります。日本の国の中心は、天皇であることは、言うまでもありません。私達にも、中心のないはずはありません。それが見えるへその内裏にあるみたまだ、とこの道では言うのです。そして、中心というものは、それが中心であるためには、価値あるものでなければなりません。みたまも中心である以上、価値あるものとして、生き活きとして働く、光輝く真玉で

あることが必要なのです。学校でも、会社でも、校長や、社長が、それらしい価値ある存在でなければ、その運営に破綻を来すことは、昨今の世の幾多の例を見れば歴然としています。

そんなものはどこにありますか、分らなくてもいい、ではないか、と言った方もおられますが、凡そ大事なものの、大切なものは、やはり、位置がはっきりしている必要があります。この船にも、確かに羅針盤はついているはずなのですが、どこについているのか分らないでは、どうにもしようがありません。

私達が生れる時には、普通、父親か母親の何れかのみたまを受けついで生れて来るんだそうですが、私達の親には親があり、その又、親があるというふうには、ずっと遠い昔に遡って行って、遂には、みたまがそこから分れて来た、一番の、もと一つの親、天なる種に帰着します。私達の、みたまは、もとは天からの分れであり、天に結ばれているんだ、そうです。所謂神さんを拝まなくとも、もともと、私達一人一人のみたまが、神と呼ばれるべきものなのだ、そうです。こう言いますと、一部の方は、それは、傲慢というものだ、と言われるかも知れません。が、天から与えられた、自己の尊厳（価値）をも、小我によって、捨て、顧みようともしないならば、その方が寧ろ傲慢だ、と言えないでし

ようか。

みたまは本来、時間、空間を超え、過去、現在、未来を貫いて生きる、火にも焼けない、絶対の存在であり、生も、死も、幸も、不幸も、凡てを支配するものなのです。そして、その奥底には、皆夫々、その人がその人たる所以の、最もその人らしい徳が潜んでいるのだ、そうです。私達有限な存在は、みたまという場に於て、無限者、絶対者―天―とつながっているのです。そのことを最初に証されたのが、女史なのです。みたまは又、私達の肺の呼吸のものを司っているのだ、そうです、その証拠に、女史は、みそぎによって、現在両肺が無いという、現代医学では理解出来ない身体的条件の下に生きて下さっているのです。

そういう尊いみたまなるものが、自分の体の内にあり、おかげはその中に包蔵されているのだ、そうですが、女史が申されるには、現代の日本人は、殆ど、そのみたまが、ひからび、丁度、うつむいて、居眠ったような状態にあって、活き活きと活動してはいないんだ、そうです。色彩から言えば、濁ったり、曇ったり、形から言えば、まん丸なものが、いびつになったり、歪んだりして、変形してしまっているのだ、そうです。尤も、世間には浮世の辛酸苦勞によって、みたまが目を覚まして活動している人もおられますが、それに濁りや、曇りや、変形があるままでは、これから先の

世には、危険なのだそうです。

この濁りや、曇りや、変形が、とりも直さず業というものです。その根本原因は、私達の遠い先祖の時代に、いつしか、智慧の方に重点を置く習慣がつき始め、遂には、みたまの存在を忘れ、蔑ろにしてしまったことにあるのです。私達が生れ落ちてからについて言うと、赤ん坊の頃の無垢のみたまのま、であれば良いのですが、序々に智慧づき、七、八才頃から次第に根性が、しにくくなり、見よう見真似で大人になる頃には、すっかり、智慧の智慧になってしまつて、みたまの方は、塵や埃で埋つてしまふんだそうです。このようになつたみたまを、中心として価値づけるためには、どうしたらいいのか、という具体的方法がなければなりません。

十一、へそがあるから仕方ない

女史の蘇苦勞は、天理教祖が到底かなわぬと言われた底のものであることは、前述した通りです。私達は、所詮女史のような苦勞には耐え得ません。又、資本主義社会の現代にあつて、修験者や、ヨガの行者のように、山に籠つて修行するというようなことも出来ません。若し、そのようにしなければならぬなら、大多数の人は救われな

う。私達は、女史と同じように里、つまり、俗世間内にあつて、既に女史が道普請をして敷いて下さつた石畳の上を、女史のご加勢を得ながら、歩ませて頂けばいいのです。その意味で、この道こそが、真の大乗的な道と言うことが出来るのです。さりとして甘い道ではありません。『苦なしに道は通れんぞい』『苦を苦とせぬが行』と申される道です。然し、その苦は、先行き光明、晏如を約束された苦なので、です。ですから、自分は、頭から楽だけを求めて、苦は一切嫌だという方は、お見えになつても失望なさるでしょう。不思議な話ですが、最初女史に面接されると、先ず、眠つていたみたまが覚醒します。そして、日夜開かれる神韻漂渺たる、修行の場に参列して、女史のみたまより颯々と湧き出る天音と、天の摂理を拝聴し、分つただけずつ実践することにより、みたまは浄化されて、濁りや、曇りが拭きされ、変形は矯正されて、次第に育成されつつ、活き活きと働き出します。これをみたまが甦ると言います。

私達のみたまは、植物にたとえたら根です。根は地下に隠れて見えません。みたまも亦見えません。だから、人がいい加減にします。根は土を盛つて水をかけたら、いくらでも肥えます。天の声（肥）によって、みたまなる根を肥やす。これが道です。

凡ての信仰がそうですが、この道に於ても大切なことは、

心の持ち方であつて、女史が、いくらみたまを浄め、育成して下さつても、濁つたり、汚れたり、乱れたりした心を持ち続けるならば、浄まつたみたまは、それを許さず、色の形で自らを裁きます。時には自らを死に到らしめることもあります。それほどに、みたまというものは、俊巖なもので、心は絶えず、みたまの要求と一致するように切換えてゆく必要があるのです。その意味で、心とみたまは、この道の修行の双関だ、と言つてもよいと思います。

この道では、そもそも、女史から天の摂理というものを、一般的に教えられたり、或は、個人的に仕込まれたりします。仕込まれるというのは、天の摂理によつて殴られ、叩かれ、こづかれることです。それには、赤子のような、素直な純な心と、信と、誠が必要なのです。

齡四十、五十、それ以上ともなれば、最早、社会では誰も叱つてはくれません。肉親の親と雖もそうです。それを女史は、お嫌だけれども、子可愛いさの故に、敢てなさつて下さるのです。これが、他にはない、この道だけの有難い徳なのです。ですから、この道は、言われに来る所だとはじめから腹を決めてお越しになれば、その方は、大いなる徳を頂かれることになるのです。

そして、この道を基とした苦を喜ぶ、という教えの根幹を實踐し、それによつて、みたまの奥に潜む、自分の徳を

開、顕、し、その徳通り生きることに、その人が最もその人らしく生きることであり、同時に自らの徳を天に捧げ、天に奉謝するということにもなるのです。これが日本人の本質を生かした、日本人としての本来の生き方なのだそうです。かくて、女史により、光輝く完全円満な真玉にみたまを仕上げられ、自我欲を捨てて、心の澄みきつた者は、自らのみたまに導かれ、世直り国助けの要人、即ち、女史の手足として、天業の一端を担う、最高の榮譽を享受させて頂くことが出来るのです。

こういうことで、この道は、みたまの親と子が、地上で、現世で、直接に交渉を持ち、且つ、天が、直接私達のみたまに乗つて、私達のみたまとともに働いて下さる、地上唯一の、真の神人合一の道なのです。これが、この道の最高の徳なのです。

會て、コペルニクスは、地動説を提し、ニュートンは、木からリンゴの実が落ちる平凡な事実から、万有引力なる仮説を唱えました。夫々その当時、これらを素直に信じた人が何人あつたでしょうか。どんな大学者が、どんなに言うおうとも、女史は、『小さい時からとらされた、へそがあるから仕方ない』と、断々乎として申されるのです。これも、天の摂理の一つですが、女史が天の摂理として申されるのは、みんな、こうした至つて素朴な言葉なのです。そ

れだけに、智慧に重きを置く方は、ともすれば、軽視される傾向があつて、そのためにご損をなさるのです。

「へそ」と言つて、これを智慧を以て否定され、嘲笑される方があるならば、私達は一向に痛痒を感じませんが、その方は、自らの生命の尊厳と、実在性を否定し、自らを嘲笑し、自らに唾するに等しいことに、思いを致されなければなりません。悲しみ、嘆くのは、私達ではなく、その方の本當のご自身、ご本体なのです。

深夜静かに仰臥し、物質としての「へそ」のあたりに意識を集中し、『自分はこの年になるまで、かかる尊い、有難い、自分自身の本体があることを知らなかつたのは、誠に相濟まない、今日それを知つて、大変嬉しい』と思つ、本當の「自分自身」に対するさんげと、喜びから、この道は発足するのです。「天上天下唯我独尊」と、釈迦が生れ落ちるなり叫んだと言われる所以は、こゝにあります。その具体的典型が女史なのです。

十二、孫子の代まで難がなくなる

昔から言われているように、私達人間は、お互にあすの日が知れません。極言すれば、一寸先は闇と言つてもよろしいかと思ひます。特に今日のようなご時勢の下では、

尚更のことです。気にしていたら、きりが無いとは言うものの、街を歩けば、凶器に等しい自動車に脅かされ、家に居ても、いつ、ダンブが闖入して来たり、火責め、水責め、瓦斯責めにあうかも知れません。たまのレジャーにも、非常階段を調べておかないと旅館にも泊れない、病院に入つても、安心して医者に治療を任しておけない、といった塩梅で、何から何までが不安に満ちています。

この道に繋がつて、天の摂理に順応して行じさせて頂く、と、業というものが無くなつて、上因縁に切り替わります。安心立命を得るのはもとより、救われきり、凡そ病というようなものとは縁が切れて、子の代、孫の代まで難というものにならなくなります。何故、子の代、孫の代までと限定されるのか、これには深い訳がありますが、こゝでは、記す訳には参りませんので、省略させて頂きます。父親や母親がこの道の教えを行じてくれたために、自分達はこんなに有難いんだ、倅なんだ、と必ず子や孫の代にも喜ばれます。私達が子や孫に残せるものは、徳を措いて外に何も無いのです。今の世の中では、難がない、というだけでも、大きな幸せなのです。

子や孫は、私達から生れ出るものですが、子や孫のみならず、私達自身が、そもそもそこから生れ出た親、その親、その又親、親々……所謂ご先祖が全部救われきり、喜ん

で天に昇り、そこから私達を守護し、私達に加勢してくれ
ます。靈界ではないのです。天です。天に昇るのです。世
直りというものは、天はもとより、そういう救われきった
先祖の加勢なくしては、なし得ないのだそうです。さきに、
この道は、みたまの親と子が、地上で直接交渉を持つ所だ、
と言いましたが、それは、仮の世の仮の契りではなく、肉
体の親子関係以上の、本当の、永遠の契りであつて、その
関係は、私達が死んでも、そのまゝ、天上に続くのです。

世間には、先祖を大切にせよという教えは、掃く程あり
ます。にも拘らず、先祖が大切なら、その先祖の一番の大
本、人類を生んだ、もと一つの親があるはずだ、というこ
とに何故思い到らないのでしょうか。親という言葉は、おや
！という疑問と驚嘆の言葉と、一つです。親という言葉に
よつて、おや！と、驚いて疑問を持てば、親には親がある
おや！その又親がある。その又親が、というふうになつて、
それならば、親の大本がなければならぬ、と気が附くはず
です。中間のもただけを大事にして、一番の大本を忘れて
いる。末にいてもとを、縁辺にいて中心を忘れていると
いうのが、今日の人類の業の最大なるものなのです。この
道では、靈界ではなく、天に昇るのだ、という所以です。

自分が救われ、子や孫が救われ、先祖が救われることに
よつて家が救われます。個々の家が救われることによつて、

国が救われます。中国には、昔から修身齊家治国平天下の
語があることは、皆さん、ご承知の通りです。

おかげ信仰と間違われるといけませんので、この程度に
とめておきますが、この道では、自分や自分の家族の利
益のために、祈つたり、願つたり、するようなことは、一
切いたしません。より原因となるもの、方を先にし、大切
にします。見える世界は、見えない原因の世界から成つて
くるのですから、見えない世界の方を先にします。肉体系
間としての自分よりも、見えない本質としての自分、みた
まを先にするのです。そうすれば、肉体系に関することは、
凡て自ら、良くなつて来ます。植物で言えば、目に見えな
い根が肥えれば、枝や幹は放つておいても、自ら生えるの
と同じです。『おかげは我が身の内（みたま）にあり』と、
この道では言いますが、おかげというものは、敢て求めず
とも、天の摂理に順応することによつて、自然に、みたま
から湧いて出るのが、本当なのだそうです。業がなくなり、
難が無くなるというだけでも、有難いことなのですが、更
にその他、よそでは絶対に得られない計り知れない、数々
の徳を授かるのです。

十三、業渦へ没入するか

光明へ浮上するか

若し、私達日本人が天の意図に反して、いつまでも、日本人の本質に目覚めず、もと一つのみたまの親を忘れ、智恵だけを、人間の最高の本質として、これだけに依存してゆくならば、先行き遠からずして、智恵の行き詰りを生じ、日本は、世界に魁けて、越すに越せない、行くに行けない、通るに通れない、混沌の極に達して、動きがとれなくなり、何も彼も一切合切が底をつき、智恵だけに頼ることの空しさ、いやという程味あわねばならないとともに、一切を、一からやり変えねばならない時が来るのだそうです。大学騒動で、担架で運び出されて来る大学の学長の哀れな姿を、報道写真で次々と見せつけられると、智性敗北の姿を、まざまざと見たような気がして、現在既に、その感を深くするのです。女史は、今に日本の大学は駄目になって松下村塾のような塾形式で教育を行わなければならない時が来ると十七・八年前から申しておられ、今日正に、その通りの事態になって来つゝあるのです。

根のない切花は、どれだけ美しくても、いずれは枯れます。台風が来た時、根の弱い植物から倒れて起き上れませぬ。混沌の極が来た時、国の諸々がどん底に来た時、予期しない事態に逢着した驚きとともに、みたまが自然に目を覚まして、不意に、暗闇で目を開いたのに似て、目指すべき目標が分らず、なすすべを知らないそうです。又、

現在既に目を覚ましていても、業があつては危いのだそうです。「見抜き見通し、どうにもならんよつて、この道が出来た」と、女史は申されます。

凡そ理屈でしかものごとを納得出来ない人は、こんなことをお聞きになつても、頭から否定されるか、閑人の閑事業位にしか、お思ひにならないかも知れません。人類の長い歴史は、謂わば智恵の歴史であつたのですから、これから先も、同じように智恵でやつてゆけると、みんな、たかをく、つています。こゝに大きな誤認と錯覚があるのだそうです。

今日私達は、自分の中心からも、人類の、もと親という中心からも、最も遠く離れた遠心の極にあります。私達は今、中心に還元すべく、コペルニクスの転換を要請されているのです。

日本人よ、智恵のみに頼ることの愚かさに目覚めて、もと（みたま）に還れ、業の鉄鎖を断ち切り、もとから仕立て、新たに生れ出でよ、自分自身の本当の尊さ（価値）を、改めて、この道に於て価値付けよ、神代の頃の日本人は、みんなそうであつたように、自我を没却し、天意に任せて、魅り価値付けられた、みたま通りに生きよ、もと一つの天の親（価値の根源）を想い起して、天に奉謝せよ、と私達は、天から矢の催促を受け、価値観の根本的転換を

迫られているのです。

日本人がこういう生き方をしてこそ、日本が、世界の指標として仰がれる国になるのだそうです。これが、さきに言った、私達の信仰の目標なのです。信仰とは、一言で言えば、信じて、天を仰ぎ見ることだそうで、真の人間の伴とは、天の摂理を頂き、本当の自分を、知ることなんだそうです。自分を知ることには垣根も宗派もないのです。要は、日本人の一人一人が、みたま通りに生きることになったら、それでいい、訳で、そうになったら、別段、この道は要らないのです。その意味で、女史は、世上で謂う教祖ではないのです。そして、来るべき混沌の極を乗り越え、天の差配の下に、平和と、光明と、清浄の、新しい次の時代を築き、万民安堵の、ゆるぎなき理想社会、所謂、みろくの世を現成せよ、と女史は声を嗶らして叫んでおられるのです。これがさきに言った、私達の先行きの目標なのです。

日本人が、その目標を目指し、そういう生き方をしたら、大國の核兵器など、恐れるに足りないのです。理由は簡単です。天の迷惑を妨げる程の悪は、あり得ないからです。女史がおいでになるから、この国が助かる可能性が、残されているのです。これは、ケチ臭い偏見や、我田引水で言っているではありません。この道あるから国が助かる。これが天の意図なのだから致し方ないのです。

若し、天意、言い換えれば、女史の思いが現成せず、日本が自滅したら、世界も亦自滅します。日本という根が枯れるからです。逆に日本という根を肥やせば、日本を除いた、世界という幹や枝は、自ら良くなるのだそうです。これは、決して、ファッショ的、独善的、日本至上主義でも何でもありません。厳とした天の摂理なのです。それ位、日本という国は有難い、それだけに責任の重い国であり、私達は、もつともつと、私達が日本人であること、日本が世界の根の国であることの、共通の自覚と、喜びを深め合うことなくしては、真の日本の統一も、調和も、否、世界のそれも、ありえないのです。

最早、科学や、宗教理論や、哲学だけでは、どうにもならない時代になっているのです。世には、現状を憂えて慷慨する人は多く、様々な論議を見受けますが、扱、具体的にどうしたらよいかとなると、納得出来る解決策を示したものは、残念ながら一つもありません。

皆さんは今、過去の空しい、栄光と権威を追って、崩れゆく業の、自壊作用の一因子として働かれるか、それとも上因縁に切り替わり、滔々たる、業の流れから掬い上げられて、明るい、積極的な、建設面の一因子として働かれるか、二者選一の岐路に立たされておいでになるのです。選択は皆さんのご自由です。時は今を措いて、もうないのです！。

よりどころ

増改築はじまる

(グラビア参照)

血のにじむ、

とくとしつたら、おどろこう。

しんじつかした、

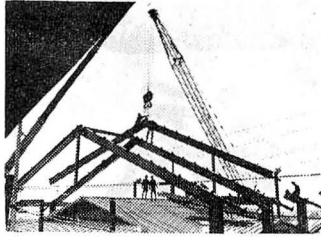
みちがあるゆえ

(垂教より)

理には順序が、段々が。

いま、一つの節が私達の前に示されて
いる。

血のにじむ—紫の間の改築が行われて
いる。それがそれである。



着工日

三月十一日

基礎打込

四月 四日

柱 建

四月十九日

棟上式

四月廿一日

竣工 七月末日(予定)

紫の間 二七〇平方米(高さ十
・一五米)

松の間 一階二二六平方米(二
十・八米)

改築総延 二階二二六平方米

九一八平方米

殖生野の高台に、天のひながたが徴さ
れてある。こ、は天の能く場である。

紫の間、それは殿堂ではない。「場」
なのである。こ、に国の礎があるの
である。

こ、から一切は始まるのである。
この道が根の根元、一切の基なので
ある。

こ、に、おやかたさまがおわすから、
世は成るのである。

こ、に人々の目当があり、こ、に人は
寄ってくるのである。

おやかた様は、こ、に、みずからのす

べてを、いけにえとして、あたらしい道
を、拓かれたのである。

みずからを、燈芯として、人類のため
に、天をあかさされたのである。お、いな
るともしびを、かかげられたのである。

道は、つづく、どこまでも、つづく。
たかく、たかく、のぼりつづけられるの
である。

改築される建物は、決して巨大なるも
のではない。然し、この道に秘められた
理は、その中に含まれたものは、お、い
なるものである。

こ、にしかない。こ、にしかないから、
比較のしようがない。それが絶対の、天
の場である。

建物は立つ。しかし、私達がおやかた
様を、たてきらなければ、この建物は意
義がなくなってしまうのである。

(高坂記)

松凡縁

今そ今、よるべなき世のよりどころ

真実あかすよわのひととき

編集部

昭和四十四年五月七日・松の間より

理はい、加減では済まされない

私に慣れていない

大阪（京阪神）で、やかたを三重に取巻く者がおらなかつたらいけないんだと言うことを昔から申してました。

でも、何だ大阪の人数、こんなことでけしからん、気に入わんと私はしょつ中思うんです。だってその半分もないんですから。

人数はございます。だけど、私がかつて（顔と名前を覚えていて）、慣れた方がありやしません。それを一体どう償うんですか。慣れる様にしてくださいないんだからどうしようもないんですよ。

私かね、何のこだわりもなく、「貴方こうして下さい、あ、して下さい」と頼める様に、本当はなっているはずでした。

それがね、気がどうしても通じないでしょう。ですからよう頼みません。だっ

て、私は「気嫌ねする性」でございますからな。

臍はわかってますよ。でも思いの方が慣れてない。それが手遅れでございます。道の遅れはそれでございます。

それが大変な苦でございます。その苦を全部しよつてるのが私なんでございませよ。

夜中^{よじゅう}坐っている

それはね、私がこう申しましたら皆さんおわかりになるでしょう。宣しいか。

つまりね、この頃又、夜中（よじゅう）寝ないで坐ってなきやならない時が何度もありますんです。

「お前不肖の子を持つちよるんじやないか。その責任は親のお前がとれ」とこう言われるんですね（「あさ」創刊号・松

風録参照。

私は初めから、そういう風に言われるだろうなということはわかっておりましたが、到々そういう風になって来ましたんですね。

ですから「おいお前、坐つとれ」と言われると（臍から）、坐るより他に方法がないんです。寝もやらさず、お布団のところでこうやって坐つて、本読むでもない何するでもない。

そうすると、お腹から、皆んなのいろんなことを、「あいつえ、で〜」、「あいつあかんで〜」とこういう風に聞かされる、それが私ね、苦でございませう。そうして又、天網をいろ〜と知らされるんです。「ヤレ〜有難いなあ」という面もチラホラ見られますけど、大方は、何か私ね、自分が悪いことしてているみたいに、自責の念に耐えかねるといふ様な一晚を越さなきゃならない時もあるんでございませう。

最初の頃は、しょつ中、夜中起きてましたけど、最近又そうならされるんでございませう。

寝ていられない、寝かしてくれない、やっぱり起きてる方がい、んだらう。寝ていて体もがいて、も仕様がないうので起きて坐る、そういうことですね。

いとも不思議である

それはね、やっぱり皆んなの気負い様が足りない、天の思惑（天の世直りの段取り）がされるんでございませう。宣しいか。カタツと順序通りはまんないでぞれてしまふんです。狂つてしまふんです。それさしたらいけないから、私が夜中起きて坐っているんです。そうするとこの女が坐っていることによつて、マア我慢してやれ、補つてやれということになるんです。

それで、すね「お前もう坐つた方がええで〜」と言つてくれるのと、それから、もうそうやって坐つてのを見たら不憫だから、もう受けとつてやろうということで一寸丸をくれるのと、どうもそういう式になつてゐるらしい。そういう形、そういういとも不思議な在り方なん

ですよ。いとも不思議でございませう。

大阪の空には業がない

それで、いつも申しますけれど、大阪に特に理が濃いつつ、ということね、それは大阪の空に業がないとこう申しますんですね。

そうすると、各地には全部業がありますよ。大阪の空には初めから業がない様にしてあるんですから。

それで、この大阪界限だけで、私の左の目を通して、全部天に通じてますから、全部見えるんです。（註・新しい道に繋つた者がこの場に入ります、その立居振舞によつて、天は日本の情勢を判断する。そして、私の左の目を通して見えるものは、全部天の仕組に入ると仰言られたことがある）

私がよくへ行つちやつたら、見えるか見えないかわかりませんよ。見えないかも知れませんよ。まあ他所へ行くということはありませんけど。

神秘の法がある

それで、こういう不思議のあることを聞き初めの方もいらつしやいませうけれども、これが神秘の法でございます。

神秘の法がなきや、何で、「この道あるから国が助かる」なんて大それた言い方しますか。そんなことを言う訳がない。

「この道あるから国が助かる」なんて、世間の人がお聞きになったら「随分言うも言うなあ」とお思ひになるでしょう。

けれども、神秘の法が、次々と、チャーソンとい、具合に成し了しつゝ、あるんじやでなとこれだけ申しますわね。

とにかく、国は一もめしますけれど、大丈夫ですよ。まあ、ご心配なさいますなとこう申します。

一だけど、一苦勞は免れん。一遍通り洗わなきや駄目なんですね。それなしに行け様はずがない。

でもステンとなつてたまるか。日本が駄目になつてしまふ様な、そんなことにはなりませんのよ。けれども、少しはスツタモンダはある。天は否応言わさん

でなと言いますからね。チャーソンと筋道曲げたらあかんでというんですね。

でも、この道が成る様になつてなかつたら、どうしても仕憎いんですよ。(国替えの順序がそれれることになる)

それで、人数がどうしても足りませんから、「坐つた方がい、ぞ／＼」というので私を坐らす。そして、その足りない面を、どうしようもない面を補わす、これ天意なんでございますね。

そういう筆法がチョイ／＼とございます。余りそんなことがとつかけひっかけあつたら、こりや私はたまんない。身がもてそうもないというかも知れません。

でも、とにかく大変でございますからね、大事でございますからね。それで、

「あ、今日も起きてる方がい、のかなか面白いな」と言つて、夜中起きてる時があるんですよ。近頃そういう事がチョコ／＼ある訳なんですよ。

私が坐ることによつて、足りない面をつぐなわすという訳ですが、面白いことがあればあるものだなあと思つてですね。

知らぬが半兵衛では済まされぬ

でも又、その裏があります。「なあーんだ」とこうなつちやうんですね。

「何だ、この人又來ないの、あの人又來ないの」となるんですよ。

それで私がつい又、「どうしてるの、あ、してるの。私が言わなかつたら、放つたらかしにしくのか」と又、何んだかんだと言いますよ。

「私がそう言う前に、何故手を打つておかないんですか」と言いますよ。これ当然でございましょう。

私は気だけで日々がもて、るんですから、こうして言うことだけは気が立つてますから申しますけど、後は又、シューンとしてしまふんですよ、この調子では、それが私でございいます。

これを、理のお方、理のもんは、知らぬが半兵衛ではすござれんので。

この道は、そういう様な、何かの償いとい、ますが、やりとりとい、ますか、こういう風にしい回すとい、ますかね、

しよつ中、これがいけなかつたらこう

するんじゃないか、これどうですか、これお前さん放つとけるんですか」とつ、きますからね。

理ですから、どうしても放りつばなしはできません。チャーンと穴埋めしなきゃいけませんのよ。宣しいか。

これが新しい道の根底、元なんですよ。

穴埋めはやかたがしている

理の根源は、どうしても「マア何とかなるわい」で放つとけない。キチン／＼と埋めていかなきゃならないんですよ。それで大変なんでございますね。

マア何とかなるだろう、仕方がないわ、もうあの人言つたつて、まるつきし来ないんだから仕方がないわ、では済まされないとはいえぬ。

結論は、私が穴埋めしなきゃならないんですよ。

（註・おやかた様が夜中起きて場の足りない面を償つて下さつたり、道の子の遅れや欠陥を、自からの一身に受けて補つ

て頂いていることを指す）

この道はたゞ行く一方

皆さんはね、道普請はもうチャーンとしてあるんですからね。私の西大寺時代が道普請でした。ですから大丈夫なんでしょう。でございますよ。

唯、歩くということ、行くということが大儀だなあということになるんでしようね。

そりやダメなんです。やっぱり、のべつまくなしに、コトコト／＼行かなきゃなりませんのよ。一服せいとか、ヤレヤレこれで坐り込めという様なことではダメなんです。そういうことだったから仕にくかつたんでございますよ。

「この道知つたら、唯、行く一方だったんやで」こういうことでございます。

それ皆さんご存知なかつたんでしよう。さあ皆さん急ぐんです。急にやあかんでとこう申しますからね、とつ／＼と走つて下さいませ。

（テープ抄文責・磯部）

桜木健古著

Ｂ六版 二四四頁
定価三七〇円・千六五円

生かされて

生きる

何が我々を生かしているのか！

生命をもつすべての根元！

解明出来なかつた自分というもの！

「天」と個人の絶対性！自己を支配している

力とは何か！

今著者は「来りて見よ」と説く。



松陰、恋闕の情

松陰の

(上)

西 沢 嘉 朗

山河 襟帯 自然の城

東来 日として 神京を憶はざるなし

今朝 盪嗽して 鳳闕を拝し

野人 悲泣して行るあたわず

上林 黄落 秋 寂寞

空しく山河ありて 変更なし

聞くならく 今皇 聖明の徳

天を敬い民を憐れむ 至誠に発したもう

鶏鳴 すなわち起きて 親ら斉戒し

妖気を掃って 太平を致さんことを祈りたもう

従来 英皇 不世出

悠々 機を失す 今公卿

安んぞ天詔 六師に勅し

坐ながらにして 皇威を八紘に 被らしむるを得ん

人生 萍のごとく 定在なし

何れの日か 重ねて 天日の明を拝せん

吉田松陰、二十四歳。秋十月二日、はじめて京都の皇居

を拝して、この詩をつくる。

松陰幼よりして、勤労と好学の家庭に育ち、特に父百合

之助は敬神尊皇の心厚く、松陰兄弟（松陰は次男）につね

に「神国由来」や、「七度び人間に生まれて此の賊を減さん」云々という頼山陽作の楠公の詩を朗唱して聞かせるのであった。

叔父の吉田大助は長州藩の兵学師範家であり、松陰はここに養子し、兵学家として身を立てるにいたるのであるが、すでに十一歳にして、藩主毛利慶親の前で、山鹿素行の武教全書を講じたという。

当時、世界はようやく騒然たるものがあつた。すでにヨーロッパよりの東洋侵略は開始されていて、イギリス・フランスの二国はインドを侵し、支那の香港は阿片戦争の結果、イギリスに奪取された。ロシアはシベリアを併呑し、カムチャツカ半島を攻略、黒龍江、樺太を経て、わがエゾ地に迫りつつあり、フランスはインド半島を経営しつ、わが国を窺つていた。アメリカはヨーロッパ諸国に比して立ちおくれではいたが、支那貿易に多大の関心をもち、新興の勢力を駆つて西進を開始し、日本に迫りつ、あつた。

このような時代である。いつの世でもそうであるが、一般の人々はそのことになんの関心を持たず、まして鎖国日本はまだ深い眠りの中にあつた。しかし、さすがに先覚識者はこの事を憂えていた。

松陰は養父大助の盟友山田含章齋や家学の後見人山田治心気齋などから、世界の情勢、憂うべきわが国の海防のこ

などについて聞かされていた。二十一歳、父母の許しを得て家学山鹿流の宗家山鹿萬介を九州平戸に訪ねて学ぶと共に、その地の海防の施設などについても調査した。

二十二歳、軍学修業のため江戸に遊学すべしとの藩命が下つた。江戸への中途、幼より聞かされていた湊川楠公の墓を生れてはじめて拝し

道のため 義のためにす 豈に名を計らんや

誓つて斯の賊と共に生きじ

嗚呼 忠臣楠氏の墓

云々という一詩を詠ずるのだった。

江戸につくと彼は多くの名だたる学者を問い、猛烈な勉強を開始したが、そのうちでも佐久間象山との邂逅はやがて彼の後半生を大きく変えることになるのである。しかしなんととっても彼にとつてうれしかったことは、江戸において多くの同憂の友を得たことであつたろう。やがてそれが彼をして亡命せしめる原因となるのであるが。

二十三歳、彼は兵学家としてまだ実地踏査しておらぬ東北方面を歴遊することを企てた。このときである。友との約束を果すため藩の許可がおりに先き立つて出発してしまつた。つまり彼の東北遊は亡命の旅となつてしまつたのである。

ともあれ、彼が先ず訪れたのは当時「新論」の著者として有名な水戸学の大家会沢正志斎であった。それから豊田天功など訪うて教を乞うのであった。この水戸学に接することによって、松陰の眼は兵学者として外に向つていたものが、さらに内に向つても深められてゆくことになり、「身皇国に生れて、皇国の皇国なる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん」と痛感するのである。幼より家庭において養われた敬神尊皇の感情は、その学的な裏づけをここに得られ、後年彼は国史と国体の研究に没頭して徹底した尊皇愛国者となるに至るのである。

ともあれ、こうして各地に学者をたずねたり、史蹟を訪うたり、土地の状態、防備の状況などを見て歩いたのであった。

かくて四月十日、四ヶ月ぶりに江戸の藩邸に帰着したのであるが、許可なくして旅立つた罪によって、帰国屏居を命ぜられて国に帰り、一室にとじこもり、読書に専念するのだった。

「帰るや急に六国史（日本書紀、続日本紀、日本後記などわが国の六種の歴史）を取りて之れを読む。古聖天子蛮夷を懾服するの雄略を観る毎に、又嘆じて曰く、是れまことに皇国の皇国たる所以なり」と云々、

このように、国史研究が対外的関連の下に行われ、皇朝

立国の本質を武威の発展において把握するのでは、兵学家としての立場ならよろしいが、まだ真に日本の国体の真実理にまで到達することは出来なかつた。

二十四歳、藩に願ひ出て自費をもつて十ヶ年諸国遊学の許可を得、正月十六日過去の汚名をそそぐべく旅の空に出た。江戸を目的地としたが途中、森田節齋や龔儒谷三山を訪ねたりして益するところがあつたようである。五月二十四日、江戸につく。その十日後の六月三日、遂におそるべき事態が発生したのである。嘉永六年六月三日、米国大統領の国書を携えて、総督ペリーは軍艦四隻をひきいてやつて来たのだつた。

松陰がこれを知つたのは四日である。彼はただちに木挽町の佐久間象山塾を訪れたが、象山は塾生たちと朝から浦賀にかけて留守であつた。松陰もその後を追つて、象山等と共に異船の動静を探索した。

幕府はペリーの武力的圧迫におそれて国書受理を承諾し、六月九日、ペリーは星条旗と軍艦旗を先頭に久里浜に上陸した。国書の受理は十分もたたぬうちに終り、明年春を約してペリーは引揚げて行つた。このときペリーは白旗二旒を箱に入れて手交し、「不承知に候はば干戈を以て天理に背く罪を正さん。その時国法を以て防戦すべし。必勝我れに在り、敵対成り兼ね申すべく、若しその節に至り相降

願ひ度く候はば、此度送り置く処の白旗を押立つべし。然らば此方にて砲を止め艦を退け和議すべし」との趣意書を添えてよこしたのである。

なんたる侮辱!! 松陰は後年このことを聞き、いかになんでもそんなことのあり得る道理はないと思ひ、「寅遂に信ずる能はず」と書いた。

時変われりと雖も、われらは敗戦によつて、昭和二十年、遂にその通りになつてしまつた。そして占領軍の弱体政策と占領憲法によつて、日本人は民族として骨抜きとなり、物的な繁栄はもたらしたとはいへ、「昭和元禄」、「昭和戦国」といわれる不可思議な日本となつてしまつたのである。

ともあれ幕府は六月十五日、ペリー渡来の顛末を朝廷に奏上した。このことを聞きけられた孝明天皇は、深く宸襟をいたためさせられ、即日七社七寺に御教書を下されて、速かに夷類を退け攘い国体に拘ることなからしめんことを祈願し給うたのである。

これより公卿や志士の間に攘夷か開国かの論議がやかましくなり、国論沸騰して来た。そのさなか、七月十八日に露国の使節プチャーチンが旗艦と三艦をひきいて長崎に入港して来た。まことに国の東西をあげて、おそるべき危機は刻々と迫つて来たのである。もはや書齋主義的学問の世

界は無縁のものとなつた。

浦賀で米国の軍艦銃砲やその隊形などを实地に見た松陰は、如何に神国と自負してみても、彼等の卓越した技術文明には一応も二応も頭をさげねばならないことを知らされ、佐久間象山の洋学知識と識見に傾倒して、その塾に毎日通学して教を乞うのであつた。ここで吉田寅二郎は長岡藩の小林虎三郎とともに象山の二虎とよばれ、象山の秘蔵弟子と目されるにいたるのである。

かくて彼は象山塾にて学び得た知識をもつて、藩主に上書してこの危急の事態に際して取るべき時務を陳述するのであつた。身分階級の厳しかつた封建時代に士籍をうばわれている(亡命して東北歴遊をした罪によつて)松陰が藩主に上書することなどは、藩の俗吏からみれば分を越えた出すぎものとされたにちがいない。彼は上書の中に言う。

「普天の下王土に非ざるはなく、率海の濱王臣に非ざるはなし。此の大義は聖經の明訓、誰れか知らざらん。然るに近時一種の憎むべきの俗論あり。云はく、江戸は幕府の地なれば御旗本及び御譜代、御家門の諸藩こそ力を尽さるべし、国主の列藩は各々その本国を重んずべきなれば、必ずしも江戸に尽さずして可なりと。嗚呼、この輩唯に幕府を敬重することを知らざるのみならず、実に天下の大義に暗きものと云ふべし。夫れ本国の重んずべき

は固よりなり、然れども天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり、幕府の私有に非ず。故に天下の内何れにても外夷の侮りを受けば、幕府は固より當に天下の諸侯を率ゐて天下の恥辱をそ、ぐべく、以て天朝の宸襟を慰め奉るべし。是の時に方り、普天率土の人如何で力を尽さざるべけんや」と。

この松陰の考え方によって、彼の国体思想を伺うことが出来よう。当時一般の武士は領主を絶対として一藩の安全を終極の目標としていた。されば自国というのは自藩を指していうのである。それを松陰は、天下は天朝の天下にして幕府の私有に非ずと、公然と否定したのである。封建の時代にかく言い切る松陰は確に一般武士より数歩先きんじていたのである。

彼はまた「急務策一則」の中に

「草奔の愚夫、ひそかに古今を達観し、恭しく惟うに、皇朝古より武を以て基を建て、四夷百蛮をして懾服馴擾せしむること、其の国体もとより然り。然るに中世このかた武臣権を偷み、皇道明かならず、国体建たず、近時に至り区々の海賊の為に輕蔑侮慢を受くること、是れ何事ぞや」

と云い、武家が政権をぬすんで以来、皇道が衰え、国体が建たなくなつたと喝破し、

「凡そ皇国に生れたる者、如何にもして、皇朝の武、古に復することを思ふべきことならずや」

とて、武士はよろしく天朝守護に當るべきを論じている。この論を読んだ師の象山さえ、「子能く之れを口に出せるも、而も未だ之れを策に筆する能はざりき」と、嘆じている。

これはまことに徳川幕府をその根底よりゆすぶるものであり、松陰の思想的大発展である。

松陰は藩主に上書するだけでは飽き足らず、師の象山ともはかつて、海外視察をして実地に十分外国の事情をしらべようとした。当時はもちろん渡航禁止なので、土佐の漁民中浜萬次郎にならつて、漂流の形式をとれば国禁にふれることもなからうといふので、折からプチャーチンが長崎に滞泊中であつたところから、うまくゆけば漂流とみせかけて露艦に救い上げられるかも知れぬと、嘉永六年九月十六日、松陰は飄然と江戸を発つたのである。このとき象山が彼に贈つた一詩。

この子靈骨あり

久しく蹙蹙^{へつへつき}の群を厭う

衣を振う 萬里の道

心事 未だ人に語らず

すなわち未だ人に語らずといえども

付度するにあるいは因有り

行を送つて 郭門を出づれば

孤鶴 秋旻しゅうびんをよこぎる

環海 なんぞ茫茫たる

五州 自ら隣をなす

周流 形勢を究む

一見 百聞に超ゆ

智者 機に投ずるを貴ぶ

婦来 すべからく辰に及ぶべし

非常の功を立てずんば

身後 誰れかよく賓せん

というのであるが、まことに生命がけの大冒険である。師象山は丙辰の年（安政三年）までに再び故国に帰つて来ることを期待しているが、誰がそれを保障しようぞ。でも日本のためにやらねばならぬ。日本を救うものは日本人以外にない。是が非でも生命のつづくかぎりはなさねばならない。他にやる人がなければ自分がなさねばならない。かく松陰は思ふ。

十月一日、松陰は京都に入った。ただちに愛国の詩人梁川星巖を訪れ、そこでペリー来航以来、孝明天皇が毎朝四時に起床あそばされ、齋戒なされて、敵国惧伏萬民安穩を御祈願なされ、お食事も二度しか召上がらない由を聞かさ

れるのであった。

幼にして敬神尊皇の家庭の雰囲気の中に育ち、長じて兵学家という立場に立たされて日本の国防のことを考え、水戸学に接して尊皇の学的裏づけを得、ペリー来航による祖国の屈辱的光景を目のあたりにして、迫り来る日本の危機の打開を考え抜いて来た松陰。それがはしなくも、祖国の運命、萬民の安危を御一身にひきうけさせ給う今上皇帝の坐しますに触れて感激おく能わず、翌二日早朝うやうやしう皇居を拝して、胸をついてあふれ出る熱涙と共に自らにして成つた萬古不朽の詩が最初に掲げた「山河襟帯自然の城」云々の詩である。幼より長じて今日に至つた松陰の歴史的経歴を思いやり、しかも今から如何なる運命になり行くかわからぬ彼の心中を察しやるとき、この詩がいかに無限の情緒をた、えたものであるかがわからう。

ここには父母の膝下を離れ故郷を去る以上の悲しさがあり、「幾山河越えざり行かば寂しさのはてなんくにぞ今日も旅ゆく」というような感傷をはるかに超したものがあつた。民の父母たる大君を思慕してやまぬ最高の人間感情が、秋風のごとくそくそくとしてわれ／＼を打つ。その皇居を後にしてわが身はさだめなき萍のごとくだだよいかねばならない松陰。何れの日か重ねて天日の明を拝せん——なんと

こうして松陰はめざす長崎に到着したが、露艦はすでに数日前出航していた。やむなく彼は江戸に引返した。

二十五歳、嘉永七年正月、前約にしたがってペリーは七隻の艦隊をひきいてやって来た。松陰は再び現地に走って情勢の探索につとめた。彼らは海流あるいは海深の測量をしたり、また平気で上陸したり、旁若無人の態度であった。これに対して幕府はひたすら穩便に穩便にと彼らを刺戟することを避けた。「穩便々々の声天下に満ち、人心土崩瓦解、皆々太平を楽しみ居る中にも、有志の輩は相對して悲泣するのみ」と松陰は記している。これで想い出すのは大争論のことである。大学当局も政府も、学生を刺戟せぬようにということに遂に紛糾を大にするのみであった。そして社会一般人は段々慢性化して考えることをやめ、レジヤを楽しむにいそがしいという状態である。昔も今も同じかと歎息するのみである。

幕府は遂に武力強圧に屈して、三月三日、日米条約十二箇条が調印されたのであった。かくて一応危機は去った。世は再び太平の夢をみつづけるであろうが、松陰は考える。今後外国人はわが国に渡来して国情はくわしく偵察されよう。しかるにわが方からなら彼らの国情、彼らの真意を知るところがない。これでは到底平和を長く続け得ないであろう。ここで再び彼は踏海の決意を固めるのである。そ

して有名な下田踏海の雄図となるのである。が、今度も失敗に終り、囚人として下田より江戸に送られた。足にはほどをうち手錠をはめられ身に綱をかけられた松陰の檻輿は江戸に入り、泉岳の前を通る。

かくすればかくなるものと知りながら
やむにやまれぬ大和魂

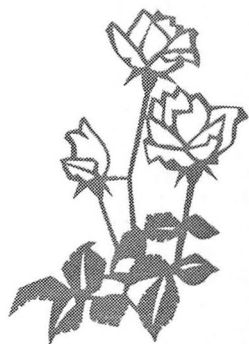
と義士の墓に手向けの歌を詠じた。それはそのまま、松陰自身の心を表出しているのであった。

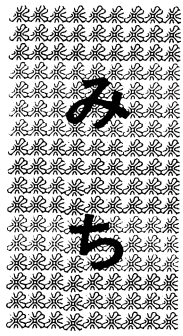
江戸で取調を受けた後、故国におくられ野山獄につながれるのである。これから彼が三十歳にて刑死するまで、幽囚の身でどのような反省、どのような国体に対する思想的深化をなして行くか、筆者は後半においてそのことを語りたい。松陰こそ最も深く日本に対する理解を示していると思われるからである。

(昭和四十四年四月十六日記)

(題字・加納如雷氏)

(未完)





みち

「ドカンドカン」

八木隆明（大阪）

先日、私は「ドカン」と追突事故を受けました。それだけならばただ一つの「ドカン」であつたものが、その事を「松の間」でお託びとして御報告申し上げたところ、その「ドカン」が、おやかた様によつて「ドカンドカン」と倍々に増幅されて返つてきました。そしてその「ドカンドカン」によつて私は実に大事なことを悟らせていただいたのです。そのいきさつを記して、私自身の「道」への信を深めるよすがとさせていただきます。

まず、この出来事には伏線があります。その御報告からはじめなければなりません。

四月下旬磯部輝男君より映画巡回班として出かけるが同道しないかとの誘いを受け、四月二十七日の早朝に出発して浜松に向いました。後日になって、この出発がそも「ドカン」の起点になつていたのだと気がつくまでには大分時間がかかつたのです。

「場」を出立すると、何となく気がせてハンドルを握る磯部君も同道に車を走らせます。するとどうだろう。その道行きどまり。あわて、Uターン。何と悟るかと思ふ。首をかしげる運転者に、すかさず声あり「いそへはまわれ。」笑声が弾けました。「新しい道」のヤングパワーたらねばならぬとの各自の抱負を乗せて、漸く活気を呈して来た早朝の市中を車はひた走りました。

「おやかた様の通られた道には同道はなかつた。否、それどころ

か「道」さえもが全くなかつた。我々のためにお通り下さつた茨苦のあとにこそ「新しい道」が出来たのだ。」ということに思いを馳せながら……。

静岡県大須賀町には大沢範高君をはじめとして若い数名の熱心な道友がいて、この日の催しを準備していました。

まだ新しい町役場の二階の大ホールが会場にあてられ、「新しい道を知つた青年の集い」と大書された看板が出されており、予想外に大勢の若い人々がつめかけていました。年輩の人も結構かなりおられました。

そして市野晴久支部長の挨拶に続いて、映画上映に先立ち私が「新しい道」についての説明をすべく壇上に立つことになつてしまいました。言うべき事をあらかじめ考へておく時間はなかつたのです。

ともかく、日本人は古来から、「みち」という言葉に格別の感情

をもつており、一杯の茶を喫するにも、一輪の花を生けるにも、更には人を倒すべき剣の技の中にも、自分自身をたかめ人生の究極的に至るべき「道」を求めてやまなかつた。それが茶道となり華道となり剣道となつた。現今の世の中の混乱、わけても次の時代を担うべき若い世代の混迷は、この日本人の本来の持味を失い、「道」を見失つてしまつたことに原因があるのではないか。新しい時代には「新しい道」が必要である。その「新しい道」を皆様方に知つていただく為に私達は遠路大阪からやつて参りました。……

と、話し出してしまうと不思議なこと、次に次から次へと話すべき言葉が湧いて来てしゃべり続けました。

この道のほかには道はないこと。本當の自分の「おや」を知る道であること。天人松木草垣女史により切り拓かれた救国濟世の道であること。この道を通る者は「へそ

が開かれ磨かれて人間完成に至ること。それが人間にとって一番の幸せであること。だから病氣や不幸の本当の原因を知って根本的に解決することの出来る道であること等々。特に「へそ」については次のようにも話しました。

「私は医者として、しばしば出産という人生の第一歩に立会うのですが、おぎあーと生まれてきた赤ん坊のへその緒が、生まれてからも暫くの間は搏動を続けているのを見ると、毎度のことながら赤ん坊と母体とのつながりの神秘さに感動を覚えるのです。しかし、これは肉体のことです。目に見える世界のことです。目に見える事柄は目に見えない真実の影であるといわれています。だとすると、目に見える「へそ」がある以上は目に見えない「へそ」がある筈です。親から親へと先祖につながる「へそ」には創造主までつながる「へそ」があります。その目には見えない「へそ」があるから私達は生かされて

ているのであります。新しい道でいう「へそ」とは、本当の自分のことでありませう。私も、新しい道を知って真の自己に目覚めたのであります。」

このほか具体的な事例もいろいろ話すこと小一時間。壇を降りると伊藤誠治君が半ば感心半ば呆れ顔で私を見ていました。

映画に続いて行った座談的な話し合いも活気があり、出席されていた町会議長白石銀次氏のこの催しに感激した旨の飛び入りの御挨拶もいただき成功裡に閉会しました。

翌日は名古屋に赴き、その夜桜木健古氏宅の、まだ木の香もかぐわしい新居の二階の座敷で、映画と座談の夕べをさせていただき、この夜も私は加賀中京支部長ともども大いにこの道を吹聴しました。遠く三重からも道友が参加して下さり、心楽しい一晚を過ごしました。

所要のあつた私は翌二十九日の

早朝の新幹線で一足先きに帰阪しました。

「ドカン」はその日の夜中に起りました。

当夜、父と共に「場」にもどつていた私は「松の間」が終ると、父の他に道友二名もお乗せして走りなれた道を帰つておりました。とある赤信号で停車した途端、「ドカン」と大きなショックがあり、飛び出してみると大型トラックにおつつけられていました。車はかなり破損しましたが、乗っていた四人は怪我一つしませんでした。しかし念のためにといたので一応救急病院につれて行かれる騒ぎでした。

警察への届けもすまじ、後部破損の車を肩身の狭い思いで運転して家に帰つた頃には、夜は白々と明けておりました。

次の夜も続いて私は「場」にもどらせていただき、「松の間」でお詫びを申し上げて、この事実を報告し、あわせて、

「今夜の御垂示のなかでも中氣（中途半端）ではあかんで、本氣になりやと仰せられました。本氣になれと言つて「ドカン」と押されたものと思ひ、やりかえて氣負うつもりです。」

と私なりの悟りを申し上げたところ、や、あつておやかた様が、「あなたね、ドカンとやられたんでしよう。それはね、よくのことなんやで。それでそのような悟りではうといでと申します。」

瞬時、「松の間」に沈黙があつたように思いました。おやかた様が続けてくださった。

「ドカンとやられたんでしよう。だったら、もうドカンドカンとやられちゃつたらいかですか。これどうですか。」

「わかりました。」と私が自信なげに答えるのに続けて、おやかた様が

「あなたね、もっと大きな声をお出しなさい。お腹から声を出したら如何ですか。今はほん喉元か

らしか声を出していませんね。」
と手で御自分の喉のあたりを示されながら、

「ここからの声ならば、どのようでも弁舌さわやかにも言えようけれど、ほん可愛いげなめんだみたいな声しか出んのじや。と申しますからね。家に帰って肚から声を出すにはどうしたらよいか考へるんですね。」

あなたが肚から声を出せるようになったら、八木も男じやなと言いましよう。わかりましたか。」

「わかりました。」
「大きな声でおっしゃい。」

「わかりました！」
その次の夜も「松の間」でお声がか、りました。私何がしかのことを申し上げると、

「あなたはタテがあつてちよんとヨコ、これでい、んですからね。そして童心にかえらんならんわけがあります。まあ七ツ八ツ位の頃までを童心とい、ますからね。その童心にかえりなさい。俺は童心

にかえるぞと女房にいっときなきさい。そしたら何でもありませんよ。」
というお言葉でした。

当然私は大きな声でものを言うように心掛けたが、一方、おやかた様が、その事で私に何を悟らせようとなさったかが段々に自覚されて来ました。

「童心にかえつて大きな声でものを言う」

その逆のことを考えてみて自分の姿がはつきりしました。

童児は人の思惑など気にしませんし、言いたいことは遠慮なく口に出します。無邪気なものです。

「へそ」は坊やであるとおっしゃつています。ところが、なまじ大人であるために自分が他の人にもどくように見られるかという事について

細かく神経を使い、人から変に思われぬように体のい、ことを言い、人を怒らせたりしないように程のい、ことを言うのを好んでいのが自分の姿です。
この道の修行は「へそ」通りに

なることを「めどう」としているた。
のではなかつたか？

もし、私の「めどう」が「へそ」だけこの道を受けている。」曰く「頭にはなくて「上つ皮の自分」にあるのならば、この道で修行する理由は全くなくなるわけです。この道につながつて七年、日夜精進の結果がこれでは実に由々しき事でありました。

「へそ」か「上つ皮の自分」か、絶えずどちらをとるかを試みられているのがこの道だと思ひます。その時に「へそ」が本当であると理解してはいても、決断があいまいであると、つい「上つ皮の自分」を選んでしまつていっているわけです。そうなると、声は上つ皮の喉元から出て来て、肚からは出ない。それでは「新しい道」について百万言を弄してみたとして詮ないことです。どうしても肚（臍）からでなくてはなりません。それが出来にくい私の業（ごう）を悟らせようとして、おやかた様は今迄に色々の言葉で示して下さつていまし

た。曰く「ぶつていっている」曰く「頭でこの道を受けている」曰く「肉体の病気ですら、いかなる名」とは出来ないというのに、目に見えないところの誤りを間違ひなく指摘されてやりかえることの出来る道は、全く「新しい道」を措いて外にありません。

私は改めてこの道でしか救われようのない自分を自覚し、この道につながり得た喜びが心底から湧き上つてくるのを覚えました。

この喜びを、まだこの道を知らない有縁の人々に広く知らせたいと氣負う次第であります。



43-7-13

大阪東ライオンズクラブ

“我等こそ大和民族”
時の彼方に置き忘れて来た民族の使命と価値に
新しい息吹きを添えて
今 苑主先生の檄は津々浦々に飛ぶ

講演旅行随記

紀州路へ

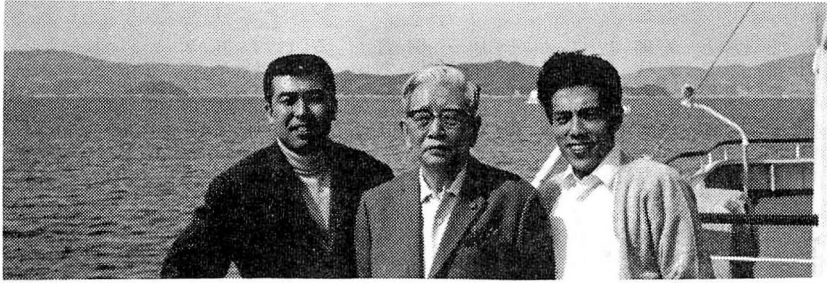
秋田 富雄

白浜ライオンズクラブ

三月一日(土)朝九時十分、天王寺
駅発くろしお一号で出発。去二月
二十二日―二十六日の高知・広島

方面ご講演旅行の疲れを癒やす暇
もなく今般は白浜へのご出発であ
る。十一時三十分、紀伊田辺駅着
西嶋支部長、楠本、上地両道友の
出迎えをうけ直ちに紀陽銀行田辺

支店三階でのクラブ例会のゲスト
スピーカーとして、題して「持た
ないものを持つたら落す」分を知
つて分に生きる人生哲学を語る」
たっぷり一時間の時間を頂いてご
講演される。
紹介者ライオンズクラブ員青木
弘氏は去る昭和三十八年二月より
道友として繋がつておられる方
である。



44 - 2 - 25
松山 - 広島間フェリーレポートにて

ご講演要旨次の通りである。

『高知で日の丸校長として有名な繁藤小学校の溝淵校長にお会いしたが、二月十一日建国記念の日の直前に起った地震のために、校庭に建っている首なしの神武天皇の銅像でこの日を祝わねばならなかった。もっと立派なものを作り直して来春は盛大に奉祝する覚悟であると語られた。因みにその銅像の作者は和歌山県の方という。』

同校長の終始一貫徹底して日の丸運動に捧げる愛国の熱意も大へん宣しいんですが、首がころりと落ちた銅像——それは自然は何かを教えているのではなからうか。もっと深い原因を掘り下げて天意を悟りとなねばならないことを話しました。この一挿話の如く、今日の学園紛争や交通問題にしても成る。ご自分のへそを真に拝むようになると、自分が何か変って来たものが分る。そうなると日々の生活の上に善なるもの幸いなるものが積みかさねられる。この積みかさねがやがて大きな力となるんで

く成って来た原因の世界を知らないでは明日のことは分らない」と前おきして、遠心の進歩発展を遂げた二十世紀の人類は、今や大自然の法則に従って求心的人間完成への一大転機に会したのであると、諸種の平和運動の限界、宗教戦争の現況、又創価学会でいう南無妙法の真意義等々に亘ってお話を進められ、

『今日こゝに縁あつてご静聴下さった当ライオンスクラブの方々に提言致します。知性だけではもうどうもならん時がまいったのである。故ケネディー大統領は明日自分が銃弾に倒れることを知らなかった。たましい。即ちへそだけが明日のことが分るんである。地上に於ける最高次元の場はへそである。ご自分のへそを真に拝むようになると、自分が何か変って来たものが分る。そうなると日々の生活の上に善なるもの幸いなるものが積みかさねられる。この積みかさねがやがて大きな力となるんで

す。これが本当のご利益リヤクなんです。本当に自分を知って分どうりに生きる、自分を作るときがまさにまいったんであります」と結ばれる。

西牟妻医師会館

例会終了後小憩の間もなく西嶋支部長運転の車で白浜、西牟妻医師会館に設けられた道友及白浜近傍の新しい方々を交えての三十名ばかりの懇談会に三時過より二時間に亘って臨まれる。早春の南紀白浜の空は小雨模様のうすら寒い午後である。

西嶋支部長、林、青木弘、市川玉置、辻岡、楠本、上地、川口道友諸氏をはじめ、来聴者に、吉信英二氏、原弘之氏らの顔がみえる。『何かが欠けているに違いない。今ものでもチエでもない……。今日の大学争動のみでなくいろんな矛盾は、何か欠けているためでありましょう。この一番大切なこ

と。これを今からうけたまわりたいと存じます」と西嶋支部長のご挨拶。

先生は毎月十二、十三、十四日と三日間、東上されホテルオークラに於いて各界のトップクラスの方々と時局に関し要談されていまして、二月十三日閑院純仁氏とロビーで暫時懇談の様様から話される。

「敗戦によって天皇様が人間宣言されようがされまいが、天皇の御位は御位なんである。たましいへ。その御位が天皇という御位をお持ちなんである。その天皇のへそが光り輝くことを御稜威というんです。大東亜戦争一軍閥の意志による開戦と、天皇様のご意志によるポツダム宣言の受諾へそが即座にひらかれたんである。又マツカーサーを自らご訪問なさったときの無心の御姿。目に見える御稜威の働きによるもので、萬一天皇様が戦犯問題にか、つていたら今日の日本はないでしょう」とい

うことから皇室問題を中心にしていろ／＼話を進められたのです。

因みに旧閑院宮様は、その後四回羽曳野の新しい道の場に運ばれてこの道におつながらなられました。

「東大問題にしても誰がこういうふう崩れると、想像したてしようにか。交通問題にても然り。日常生活においても一歩外へ出れば命の危機を感じるということも未曾有のこと。戦時なら覚悟も決められようが大へんな時勢である。アポロ八号にしても知性の暴走であって、地球上を矛盾と困難に陥し入れにおいて何が月の探険でありましょう」これらの矛盾の原因を掘り下げねばならぬ必然性を強調されると、もに、

「今や人類は天の経綸を知って、天の秩序に則つてゆかねば救われぬ。第二のルネッサンスは日本から世界に及ばざねばならぬ。その前夜が今日の秩序なき混乱の姿でもある。だん／＼日本は暗闇に

入ってゆくであろう。人間の知性や努力ではどうにもならない時がやって来た。併し乍ら闇深くして黎明近しである。

そこで闇が来るんだとの覚悟を決めて、今の準備をしなければならぬ。その準備とは先ず、自分を立派に作ることである。自分を作ることは、分を知つて分に生きることであり、同時に知性人間から叡智の人間に進むことである。叡智の人間になるのには、頭でなくへそを知つてへそを磨くことである。

新しい道の人作りとは実にこの事である。来りて見よ！と叫びたいのです」と。

ホテル朝日荘

ドライブウエイを通過して三段壁にある「朝日荘」に五時五十分到着。医師会館出席の道友や吉原氏らと、もに夕食にあずかる。途中大浴場入湯のときも含めて立



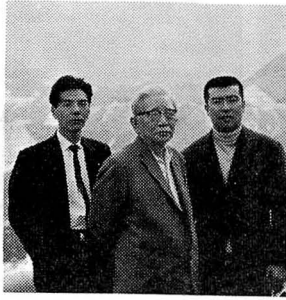
43 - 9 - 26
大阪枚岡ロータリークラブ



43 - 9 - 17
大阪梅田ライオンズクラブ

てつゞけに四度びも十分間前後の
停電に遇う。トランスの不調とい
う突発的原因はともかくとして、
『闇深くして黎明近し』のご講演
の示唆のみならず、和歌山支部へ
の気負い如何を自然はお見せにな
ったのであろう。

早春の四国路へ



高知より松山へ、早春の四国
山脈を越えて、
天村先生（中央）左高坂、右
伊藤随行の青年部員

翌朝は生憎の雨。ホテルのロビ
ーで青木弘氏の問いに懇切丁寧に
お答えになる先生であった。
午後三時白浜発くろしお二号で
帰阪。雨は和歌山駅辺りまで車窓
をたなびていた。

高坂 甚之助

昭和四十四年二月二十二日(出)

昨日の雨も晴れあがった。風も
なくわずかに薄雲がひろがってい
るばかり。予定を半時間遅れて、
午前十時五十分、高知行の機は伊
丹の空港をとびたつた。

眼下にひろがる鳥瞰図は見るま
に変わり、鳴門、淡路、そして雲間
に四国山脈が見えて来た。高度二
千五百、機はいったん茫々たる太

平洋に出て、機首を下げる。大地
がせりあがってくる。

午前十一時三十五分、さほどの
揺れもなく着陸。空港には先着の
八木、伊藤、磯部の三青年部委員
が手をふっていた。

早速、宿舎と講演会場になつて
いる高知市内の城西館に向かつて
車を走らせた。

車は「場」のクラウンエイト。
この車で四日前に磯部、伊藤両君
が高知入して、準備にとりか、つ
ていたのである。

車窓を流れる風景は、その緑は
鮮かに、その家並は軽やかに、陽
をあびて、いかにも南国、そんじ
う感じの山川である。

五台山を左に見て、やがて高知
市内に入った。

高知市。山内一豊の築城した大
高坂城跡に五層の天守閣が聳え、
その南に、東西に流れる鏡川の清
流にそってひろがる街は、三方を
五在所山、不入山、秋葉山にすっ
ぱりといだかれていた。



43 - 10 - 15

伊東ライオンズクラブ



43 - 11 - 20
八尾ロータリークラブ



43 - 10 - 23
大阪関西ライオンズクラブ

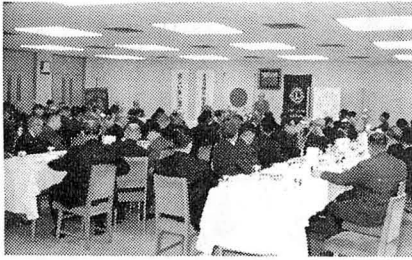
三月二十三日(日)

街並は近代的なビルが建ち、明るい陽ざしをあびて、市内電車のどかに走っていた。
宿舎の城西館は、市の南西、坂本龍馬生誕地のほとりに新築された七階のビルであった。
一旦部屋に落ちつかれた苑主先生は、軽い昼食をおえられると、旅のつかれものもかわ、高知新聞社に田所常務を訪問された。
城西館にもどられると、そこへ、三和銀行高知支店長、袖花昭氏、支店長代理、滝山利治氏が米館され、グリルで小一時間会見された。
そうする内に、京都、兵庫、伊東から来援の道友各氏が三々五々挨拶に見えられた。
朱色の播磨屋橋から、帯屋町のあたりの夜を歩いていると、珊瑚と松魚のにおいがある。
郷土にて有感
波高し 龍馬を照す 冬の月
天 村

天 村

苑主先生曰く、

明けた。晴れている。よし。応援にかけつけて下さった道友三十数人で午前九時から会場準備にかかると。
十時半、高知新聞田所常務と共に、山崎勲氏夫妻が、苑主先生を訪ねて来られた。
山崎勲氏は、競輪選手であるが、ご自分が心身障害児を持たれて、そのお子さんは亡くなられたが、肢体不自由児協会、重症心身障害児を守る会などに関係され、今度、その施設「希望の家」を造るべく努力をされているお人である。
「希望の家」を造る土地を定めると、そのあたりの住民からの激しい反対にあい、何度もさてつして、今度、何度目かの土地が決定して、又々周囲の人々に反対されどうにもならなくなっておられる事を、田所氏をとおして苑主先生がお知りになり、いくらかの寄附をなさる気持でお会いになったのである。
「この夏、ご夫妻のご苦労を知り、私も高知県の出身であり、六十数年前に高知を去り東京へ出てしまいましたが、代々の先祖がこの土地にお世話になったお礼の意味も含めて、わずかではあります、お役に立て、頂ければ幸いです。(註 金一封を寄附された)」
お二人のなさることは誠に立派な事でありませう。それなのに困難が多く仲々思う様に運ばないというのは、石が流れて木の葉が沈む様な狂った世の中だからです。だから例え良い事でも通じにくいのです。
しかし、その苦を喜べ」と申したい訳で、反対の多いことは却って有難い事です。難があるから有難いのです。ね。勇気と信念を持って今の困難を乗り越えて下さい。それから、小児マヒの子供さんが年々増えて行くだろうと思えます。
施設を造る事も結構です。しか



44 - 1 - 28

大阪八尾ライオンズクラブ



44 - 1 - 22

大阪阿部野ライオンズクラブ

しそのような形而下的な事ではどうにもならないのだという事をお考えいただき、もつとその問題を深く掘り上げて、その元を知っていただきたいものだと思います。

特に戦後、性の解放がいちじるしくなり、特に女性の「性」に対する考え方が乱れて来ております。例え夫婦であっても「性」を享樂のものとする事は許されないものであって、その乱れが、今日肢体不自由児が多く出来る原因になっているのであります。ですからこうした形而上の原因を矯正する道を聞かなければなりません。私が新しい道を提唱する所以もこゝにあるのです。

和夫氏を紹介する。

楠氏は、開会の挨拶を兼ね、ご自分の新しい道の場における三ヶ月間の下座奉仕で体験された事、悟りとられたことを淡々と語られる。嘗ては、革新議員として（現在も社会党議員）理事者側にするどい質問のほご先を向け、激しくつめよられた面影はすでになく、そこには丸い、暖かい楠氏が、青年のように紅潮して、情熱を内にひめて語っておられた。

映画「新たなもの生れたり」を始める前に司会者から、簡単に「新しい道」と「おやかた様」の紹介があつて、そして部屋は闇につつまれた。

第二部

司会は東京、伊藤誠治君にかわつた。

十分間の休憩の後、舞台の左隅に立った彼は、「松木天村と新しい道」のパンフレットを手にして、

苑主先生を紹介する。生れて初めてという司会を、彼は立派にやりとおした。

長講二時間（講演別ページ）

苑主先生の声は次第に熱をおびてくる。最後には、もう言葉ではない。ご自身の熱気を高知の人々にむかつてた、きつけられるような感じであつた。すでに言葉ではなく、言葉以上のもので打つ何かを感じる。高知の県民性に何かそうしたもの流れを感じる。

土佐のいごっそうという言葉で表わす、一種の気骨を苑主先生にも、そして、苑主先生がお会いになられた何人かの人々にそれを感じる。寂として声もなく、まして途中で立つ人はなかつた。いや、立てなかつたと言つた方がよかつたのかも知れない。

「水」ノ壇からおりられた先生は唯一言。そして一気に飲みほされた。

人々は帰つた。あとに道友達は

宛主先生をかこんで、城西館の玄関前において記念写真を撮った。そして陸に海にそして空に、それぞれの帰路についた。その頃から早春の雨が高知城をつむように、静かに道をぬらし始めた。

夕食は、高知の有志に、「椿亭」に招かれた。我々青年部もおともをして、土佐の皿鉢料理をご馳走になった。伊万里の尺を越える大皿数枚に、饜のた、きやその他を盛って見るも豪華な料理であった。その席で宛主先生は即興自作の土佐節をうたわれた。

土佐はよいとこ 黒潮うけて
春を待たずに 花が咲く

土佐の娘さんは 小麦の肌よ
こねてまるめて 味みたい

うちの情愛さんは 浪速の空で
どうしているやら 便りまつ
席にはべる女性たちは盛んな拍手をおくり、「先生の新しい歌詩

をはやらせませす」と喜んだ。

思いが大阪の空へ行くと旅の情が胸にしみ入るようであった。我々若いものは、古い娘さん達に「ハシケン」というものを習い習い土佐の夜のひとときを送った。「椿亭」から九時頃城西館に帰

つてみると、繁藤小学校長、溝渕忠広氏が待っておられた。

溝渕校長は敗戦国日本に於ける日の丸運動の先駆者として全国に有名である。

青年部の磯部、伊藤両君が訪問して、今後の新しい道の講演会におさそいしたところ、喜んで出席させて頂くとのことであったのに、本日は、どうにもならない急用が出来、昼には出席出来なかったお詫びにとおいで下さったものがある。

溝渕校長は、「神武天皇像の首が落ちて、その復旧工事をやっておられます。又現代のあり方を見て、私はせめて、その流れをせきとめられるだけやってみるつもりだ」

という意味の事を話された。

それについて宛主先生は次のような意味の事を語られた。

「像の首が落ちたという事をなんとお悟りになりますか。日の丸や紀元節というような形ばかりを追っても、国の首ねっこも上げてしまおうと何故おさとりになりませんか。神武天皇像の首をつないだつて、この日本の国の茫々たる流れをとめる事は出来ませぬ。今は唯、流れるだけ流して、その間に新しい溝をつくらなければ、所詮、流れをとめる事など出来るものではないです。あなたもその辺のところをよくお考えになっていただいで、私は決して、像の復旧や紀元節がだめというのではなく、それだけでなく、もっと深い元を考えていた、きたいと思ふのです」

日の丸校長は、一時間ばかりロビーで話され、そして耳かたむけられ、そして愛用の野球帽をか



ぶりなおして、小雨の夜のなかに帰っていかれた。

二月二十四日(月)

わが胸の燃ゆる思いにくらぶれば
煙はうすし 桜島山 国臣

高知の人々も、激しいけれど、
でも死主先生は、国臣の心に似て
いるのではなからうか。

維新の時に、坂本龍馬ら何人か
の傑物を生み育てた土佐の山河に
も、その龍馬の声にどうしても藩
自体がついてゆけず、長州、薩摩
に一步も二歩もゆずってしまった。
あの姿に、私は土佐人の心を見る。

昨夜の雨もあがって、薄雲がひ
ろがる下の、高知の街に、たしか
に数多くの素晴らしい傑出したもの
を見ることは出来る。しかし、街
全体を観するに、やはり田舎の街
だという感じはぬけない。ひなび
た味というのではない。田舎とい

う感じの街である。

午前十一時、城西館をあとにし
て、車は道を国道三十三号線にと
って松山に向かった。

右に四国山脈の雄、石鎚山を、
左に笠取山を見て、仁淀の溪流に
そって淡々と続く舗装道路百三十
軒。仁淀の上流は、濃いみどり色
の湖となって岩の間を下ってゆく。
溪を左に、段々畑の小山の間を

県境まではゆるやかなのぼり道が、
大きな曲線をえがいて続いていた。
愛媛の県境をすぎて、三坂峠に
さしか、ると、今朝早く降つたら
しく雪が風景を白くしていた。土
佐では見られなかった雪である。

高知より松山へ
山脈に残りの雪や 四国越え

雪で思ひ出すのが、「雪白」と
いうことである。雪よりも白いと、
ある画伯がおやかた様の事を称さ
れた。

峠に立って眼下にひろがる化粧
した山脈を見ていると、ひしひし

と身にせまるものがあつた。

道端に何台も車が乗り捨てられ
てある。雪で峠をのぼりきる事が
出来なかつたものと思われる。我
々も今朝早く出発しているとある
いは雪に足をうばわれたかも知れ
ない、などと語り合いながら、化粧
した風景を遠く近く眺めながら、
やがて松山へ。

松山。そして道後温泉。宿は
「ふなや」という旅館であつた。

道後温泉は寒々としていた。

「ふなや」という旅館は道後でも
古い格式のある家らしかった。数
年前に陛下がおいでになつたとき、
このふなやにおとまりいただいた
と女中が話していた。

その宿の、部屋にそなえつけの
カラーテレビが百円入れると二時
間だけ写るといふのをきいて、よ
りひとしを寒さが身にしみる。
夜のいでゆの街は、漱石と子規
のにおいがそこ、にする。タル



44 - 4 - 9
大阪枚方ライオンズクラブ



44 - 3 - 6
大阪福島ライオンズクラブ

トともぐさの街である。

道後温泉にて

坊ちゃんので湯の街や春寒し

天村

二月二十五日(火)

いでゆ湧く、道後の里の旅ごころ
ふなやの下のせ、らぎの音 華平

道後の朝はホテルのせ、らぎに
始まる。

シーバレス号(フェリボート)が
霧笛をならして三津浜を出たのが
十一時四十分。往き交う船と山々
を遠く近く眺めながら、白い航跡
を残して、一路、広島へ。かもめ
が一羽ただよう、波静かなこんべ
きの空と海である。

広島、宇品の港には、三王支部
長等数人が出迎えて下さる。宿は
ホテル・ニュー・ヒロシマ。平和公
園の一隅にある。

会場、原爆資料館をはさんで宿

のニューヒロシマホテルの反対側
に建つ平和記念会館、その二階中
ホールに七十数名の人を集めて午
後六時三十分。支部長の挨拶で講
演会ははじめられた。

高知の会場に比べて、熱気はな
い。しかし静かな雰囲気の中に
淡々とした先生の講演が、ひたひ
たと潮の満ちるようにひろがって
ゆく感じであった。

午後九時、楠氏の閉会挨拶で終
了。外に出ると公園も会館もドー
ムもふかふかと夜のとはりの中
でねむっていた。遠く自動車のヘッ
ドライートの光が国道二号線を交錯
していた。

明日も又晴れてくれるであろう
か。先生は午前九時四十五分の東
亜航空便で帰阪される。

ニュー・広島ホテルにて

春の夜やネオン彩色原爆都 天村

《註》忙がしい旅情の中で天村
先生の俳句を二つ紹介しました。

ふやすと決めたら
やっぱり安全有利な

三井の貸付信託



元金保証
高利回り
年7分2厘7毛 (5年もの
子息配当率)
年6分3厘5毛 (2年もの
子息配当率)

三井信託銀行

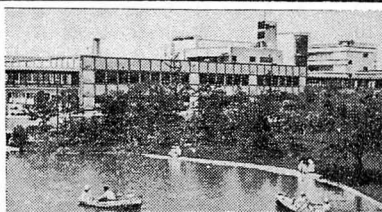
阿倍野支店

大阪市阿倍野区阿倍野筋1丁目3番15号

大阪 623-3181 (代)



ミツイハイパソン



すぐれた環境から
生まれるロートの製品

清潔な環境と最新の
オートメ機構から生
まれるロートの製品
新しい狙いの胃腸薬
(パンシロン)
合理的配剤の目薬
(Vロート)こそ
優れた環境が生んだ、
技術と真心
の結晶です。
ロート製薬株式会社

新しい道提唱者

松木天村先生

(トピックス)

1ヶ年間

ロータリークラブ }
ライオンズクラブ }

例会ゲストスピーカー

年	月	日	演 題	会 場	ク ラ ブ 名
43	1	11	負けて勝つ = 人生哲学を語る =	大津・芭蕉園	大津ライオンズクラブ
"	7	19	誰が間違っているのか？	十三・ ビクトリア会館	大阪淀川ライオンズクラブ
"	8	28	人類の黎明に向かって	茨木商工会議所	大阪茨木ロータリークラブ
"	9	17	日本ライオンズクラブ拡大の意義と－ －国家的使命を思う－	阪神百貨店	大阪梅田ライオンズクラブ
"	9	26	生かされて生きる	枚岡体育館	大阪枚岡ロータリークラブ
"	10	15	日本民族の独自性とライオンズクラブ	伊東・海女屋	伊東ライオンズクラブ
"	10	23	知性文明は崩壊する	大阪都ホテル	大阪関西ライオンズクラブ
"	11	20	自然国家日本の高次の理念を語る	八尾農業 協同組合	八尾ロータリークラブ
44	1	22	遠心的進歩発展を遂げた二十世紀の人類は 今や救心的人間完成への一大転機に会す	近鉄百貨店 阿部野店・ 集 会 室	大阪阿部野ライオンズクラブ
"	1	28	明日の日本を予断する	近畿相互銀行 八尾支店	大阪八尾ライオンズクラブ
"	3	1	持てんものを持つたら落す	紀陽銀行 田辺支店	白浜ライオンズクラブ
"	3	6	神秘に生きる	三和銀行 野田支店	大阪福島ライオンズクラブ
"	4	9	理念なき主義の対立は国を乱す	枚方市民会館	大阪枚方ライオンズクラブ
"	5	1	へそ談義	阪神百貨店 グリーンルーム	大阪西ライオンズクラブ
"	5	27	現代の知性文明は崩壊する	オリエンタル ホ テ ル	神戸ライオンズクラブ

松木天村講演要旨

日本の
国々を
つくり
直す



昭和四十四年二月二十三日(日)

高知市城西館大ホールにて

|| 民族の理念なき

主義の抗争は国を亡ぼす ||

理念とは何か？

理念とは、理をおもうと書く。この念う理は天地宇宙の摂理（秩序）のことである。この摂理に因つて生物人間より先に国土が生じたのであります。此の地球上に成るべくして日本という国が出来たその理（わけ）を知り、国家民族形成の真義（天意）を把握することでありませう。

昨年十月「新しい道」の会をホテル・ニューオータニで開いた時、参議院議員楠正俊氏は、国家理念について「かつて京大名誉教授高田保馬氏が其の著作の中で『国家とは防衛組織だ』と述べているが、しからば一体何を防衛するのか？戦争には完敗したはずの日本が今日一億の人口を擁し、経済成長は戦勝国をはるかにしのいで世界の耳目を驚嘆させている。それでは国の文化財を護るためか？それも京都、奈良に無傷のまま、残っている幾多の文化財を思えば当を得ている論とは云えない、しからば一体何を護る為に国家組織を構成するのであるのか？

国家の理念を護るためなんだ。

ところが今日の日本では国家の理念がはっきりしていない。国家の理念どころか教育の理念も定っておりません。だから日教組などに振り廻されたり東大問題などが起つて来るのであります。

私は国会の文教委員をやっておりますが、国家の理念の分母に宗教がなくてはならないと考えているものであります。現在松木先生御夫妻によつて進められている、「新しい道」こそ日本の理念を解明すると同時にこれを把握して、救国日本の道を新しく推進展開されるのだと信じます……」と語られました。国民が国家の理念を正しく把握していたなら、今日の様な主義の対立激化はもとより、社会秩序の混乱などは起らないであります。理念は主義思想を超えた高い次元の存在であり、歴史以前、宗教、科学、哲学以前のものであります。それは形而上絶対存在の原因世界であり、無限なる究極の場から成つて来る宇宙大秩序に撃る所以のものであります。

自然を宗教と科学に分裂している

哲学者が称える“絶対妙”は天の究極の場である。“相對妙”は天に対し地であり、いわゆる人間に於ける最高次元の妙所である。宗教家はこれを“真空妙有”と称え、日蓮は“南無妙法蓮華經”の曼陀羅を遺し、創価学会はこの曼陀羅を御本尊として祀り百万遍拜んだらご利益があると説いている。

科学者は物質の究極を発見して原子核と名付けたのである。この究極の世界は一ミリの何億分の一という極微の世界であり、尚その奥（素粒子）の実体把握に懸命である。この様に哲学も宗教も科学も目指す究極においては一つのゴールに到達すべきものである。

自然（宇宙）は宗教でも哲学でも科学でもない。これらが綜合統一された秩序である。従つて自然の一部分である人間が知性の高度進歩による過信（自惚れ）により、自然の大秩序を宗教と科学の二つに大きく分裂せしめたのである。為に宗教、精神的分野はいよ／＼暗く、科学も絢爛たる文化の華を咲か

せたが、遂に人間疎外という恐怖の核兵器と、コンピューター時代を来たらしめたのであります。世はまさに“石が流れて木の葉が沈む”が如く矛盾だらけである。この矛盾は二十世紀において人類が犯した最大の錯覚という事なのであります。

宗教・科学統一の場

割ったものは元にもどさねばなりません。しかるに二十世紀——ことに現代人の多くは合理主義、科学主義という知性一辺倒に傾き、知覚で把握られないものは承認しないのであります。このことが大きな錯覚なのであります。

あらゆる合理主義者が答え得ない一つの質問があります。それは「貴方は御自分が自分の意志で生れたのですか？ 又貴方は自分の意志で死んでゆくのですか？」人間は誰でも生のスタートも死のゴールも自己の意志ではどうすることも出来ないのです。生れようと思つて生れたのではなく、死にたくなくても時が来れば死んで行くのです。

ところが人間というものは、文明（知性）が発達すればするほど生かされて生きていくという根本的な問題を忘れ、おれが／＼と、自分が働いて、自分が食つて、自分が楽しんで、自分で生きていくんだとばかり万事が自己本位、人間中心主義となり、宗教は叶わん時の神頼み式に、神を人間の道具にし、科学は自然を征服して人間の為に利用するものだと考えている。

たとえば来年開かれる万国博にしてもそれである。衆知を集めて作つた日本万国博テーマ“人類の進歩と調和”と細目のサブタイトルの悉くが実に浮薄な御都合ばかりが列記してある。我々が進歩と共に調和の生活を営むことは人類の悲願であり、同時に創造主神のよみしたもうところである。

しかしこのテーマは結果の世界ばかりを求めたもので、成つて来る原因の世界を無視している。何事

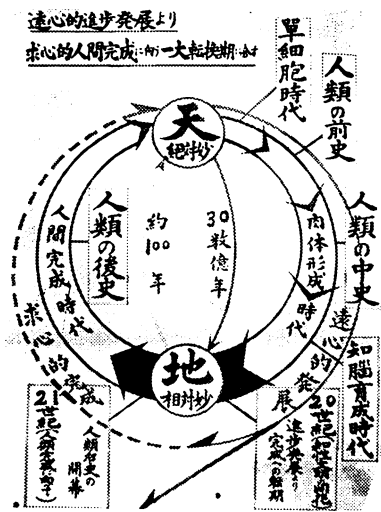
でも原因あつての結果である。原因の世界を矯正することなく、都合のよい結果を得ることは不可能事に属する。

今一つは生かされて生きる。我々人間が、生かして下さっている親なる自然に対し、捧げるものは一つも見当らない。親なる天に報恩の誠をさ、げる、これ大自然の秩序であります。三年前わたしは新聞で万国博の発表を知った時、これは大変な事だ、三年先は安保問題をひかえて此の国の社会情勢は異常な変化を来す。この様な国際の大祭典を引き受けるには経済的にも時間的にも莫大な負担を覚悟しなければならぬ。がたとえどんなに負担がか、つても真の進歩と調和にプラスするのであれば結構だが、却つて国内的にも国際的にもマイナスになるのではないか、と私は杞憂したのでありますが、今日すでにこの予見が適中する社会情勢の悪化が見られるのであります。

神は秩序である

話は一寸変わりますが、今から四年前の秋、アメリカの人類学者、哲学博士ジナ・サーミナラ女史が来日するとき、私はホテル・オークラで女史と対談いたしました。その時私から女史に質問いたしましたのであります。

「貴方はキリスト教者と伺っていますので特にお聞きいたします。聖書の創生記の書頭にある『初めに言あり、言は神なり、言によつて万物がつくられたり』この聖句は日本人はキリスト教信者でなくても誰でも知っているのですが『言は神なり』という真義が分っていないのです」



「そのおたずねは大問題ですが、私は二つの言葉にしてお答えします。一つはロゴス、一つは秩序であります。」

この女史の答は立派であります。女史の云うロゴスも秩序も日本的に理解するなれば、理（ことわり）“新しい道”の要語である処の天の理であります。又理は神であり、神は理であるというのと同じであり、理念の理であります。

この女史のいうところは、故鈴木大拙博士が仏教哲学の究極を“真空妙有”と喝破したのと一つであり、又先きに申しました哲学的表現の“絶対妙即相對妙”と同じであつて、言、理、妙そのもの、場を指摘するに至っておりません。それは絵に画いたボタモチで味も栄養もない觀念論であります。

今日われ／＼の求めるものは神そのもの、理そのもの、妙そのものであります。いわゆるその場を見把握することです。これにひきかえ理論物理学の進歩は原子核なる物質世界究極の“場”を発見するに至り、これを応用して、今日の如きコンピューター文明、いわゆる核時代をつくりだしたのです。

これとは次元の異なる宗教の分野は少しの進歩もなく、未だ神そのもの、妙そのもの、即ち無限力をもつ統一真理の場は発見把握されていないのであります。

知性文明の極限

人間の知性の所産である二十世紀の物質文明は今日その極限を示すものである。それは人類の悲願である“世界平和”は空しく、知性の化身は恐怖の核兵器となり、人間の作ったコンピューターは人間疎外の課題を投じたのであります。

そこで今や我々人類は知性とは何ぞや？人間とは何ぞや？という課題に大きくぶつかったのであります。

今から三百年前フランスの哲学者デカルトは「われ思うが故にわれあり」と人間自分を哲学して「自分とは肉体でも心臓でも血液でもない。もの思う心が本当の自分である」と結論したのであります。

このデカルトの人間観が、あらゆる近代の学問の出発点となり、しかもこの心の問題は少しも進展していないのであります。進歩の無い現状維持は、不斷に生成発展して止まない歴史の中にあつては、退歩以外の何ものでもありません。

これが知性の限界を示すものであり、知性に基く平和論争によつては、人類の救いはありえない事は、戦後二十数年の歴史が即座に実証しているところなのであります。

又地球上に主義なるものが氾濫し、その対立抗争は日を追つてます／＼烈しく、為に人類は苦しみと悩みの底に呻吟しています。主義こそ人間の知性に基づく物の見方、考え方の最たるものであり、実に低次元のものである事を知る我々にとつて、当然のなり行きと結果であります。来るべき新しい世紀は、主義を超えて高次元の神智に基くものでなくてはなりません。

ここで思い出されますのはM R A（道義再武装）運動であります。この運動の提起者故ブクマン博士は「世界は神に導かれる人々によつて導かれなければならない。世界を挙げて神に委ねようではないか」と叫んだのであります。

博士も又「高次元の神智」によらなければ人類の救いは無い事に気付かれていた様ですが、たゞし神については語られていない。神とは果して何なのか、どこにどうしておわしますのか、これが明らかにされていない限り観念的な言葉と運動に終り、その実を挙げ得られないのであります。

心とは？ 神とは？

漸く心と神について「新しい道」の指向するところを述べる順序となりました。

一九六六年の初夏、東京神田の学士会館で「新しい道」講演会が開催されました。私は此の壇上で「心は物質だ」と語ったのです。これが問題化して論難されたので一へそ学序論」を草し学会に提出いたしました。すると一年後一九六七年秋、この論文が日本人として初めて哲学部門アカデミア賞を受賞いたしました。日本学士会は先天的存在のへそ（魂）の無限性と後天的存在の心（知性）の有限性を承認したわけです。

心は誰でも持っていますから、最も身近な話をすれば皆さんはキットお判りになるでしょう。

夜間熟睡すると、昼間働いていた心はなくなりません。心がなかつたら自分というものが意識されませんから何時間か無（死）の状態に置かれます。眠が醒めると再び自分が発見されます。

このことは、デカルトのいう心（自分）がなくなっても眠を醒ましてくれるものが心とは別に存在することになる。この存在が生命というか、へそ（魂）に外なりません。この靈性へそがあるから生まれて生かされているわれ／＼人間なんです。

へそは天なる無限から成らされたのである。「われとは心なり」と哲学したデカルトは、脳細胞の働きに基づく有限性の心を人間の基底と考えた。現代の混沌と錯誤はなるべくしてなったのであり、近代の初頭においてすでに芽吹いていたと云い得るのであります。

二十世紀の我々は、この低次元の「心」の拘束から脱し、より高次元の腹部靈性へそに目覚めなければなりません。腹部靈性の中枢に位するへそ（魂）は、地上における最高次元の場であるとともに、宗教の目指す「真空妙有」の場であり、又哲学的表現の「相對妙」の場であります。

又、心には二ツの根本要素があります。

その一つは自由であります。人間の自由は心だけで、たとえ自分の肉体であっても自由にはなり得ません。病氣したくなくても病氣になる。思わぬ時に思わぬ処で怪我をする。死にたくなくても死んでゆく。心の自由以外に人間は誰でも差別なく自由は許されておりません。心だけに絶対的自由が与えられ

ているのです。たゞし天の理に添わない悪い心づかいの集積は、やがて必ず天の審判が降ることは論をまちません。

もう一つの心の特質は、自分を守る武器だという事であります。自然はすべての生物に自己を守る何かを与えています。虫類の保護色、動物の牙や爪、人間は心の働き即ち知性であります。

どんな聖人君子でもいざギリ／＼に切迫した場合は利己的になります。

この様な心即ち知性に基く平和論争は、何時迄待っても世界平和を實現いたしません。知性を超える高次元の靈性へその妙所を開顕し、天につながる叡智の湧出によって導かれなければならない明日の時代がやって来たのです。

人間は靈肉一如の存在だという事は誰でも承認するところであります。ところが肉体の面は現代医学によってこと細かに分っているが、靈の面は未開拓で分っていません。

それは宗教家も科学者も哲学者も、デカルト以来少しの進歩もなく、心が人間の基底だと誤認したまま、心の奥にへそ（魂）なる高次元の基底が存在することを知らないためであります。心はあくまでも後天的有限であり、へそは先天的無限である事は既に述べました。

我々人間は、十月十日の母胎の中で臍緒によって母の乳房につながって生かされているときは未だ心は生じておりません。この世に誕生してから後に、肉体の成育とともに脳髓細胞が出来て、漸く心が生じるのです。自分の肉体をつくり心を生ぜしめるものがへそ（魂）なんです。この靈性へそは天なる無限につながるものであり、親なる大靈の分靈に外なりません。

靈肉一如とは、肉体を宮として、内に神が宿っていることであります。哺乳動物はへそがありますが、そのへそは万物の靈長人間のへそとは全々次元が異なり、いわゆる動物性なのであります。

人間の靈長たる所以、真の価値はへそにあるんでありまして、古来吾々日本人はなんとなく腹に重点を置いたのであります。それは他の民族と異なる独自性です。

これに対し西洋人は、心即ち頭脳に重点を置くものです。頭脳の働きは、動物性神経を主体とするものであり、へそなる腹脳の働きは植物性神経を主体とするものであります。

前者は後天性の第二次のもの、後者は先天性の第一次のものであります。

この様に西洋と東洋、ことに日本民族と其の他の民族ではその独自性（持味）において全く異つてゐるのであります。

このことは、宗教、哲学、科学以前の問題であり、今日の合理主義や科学主義によつては捉えられない高い次元に位する国体の精華であり、又ここから日本の理念が生れるのであります。

日本の最古の文献「古事記」は天地初発の条りにおいて「高天原に成りませし神の名は天之御中主神」と記しております。高天とか天之とか命とかは敬語であり、修辭語であり、形容詞であり要するに修飾語に過ぎません。

この敬語と飾りを取除くと、本当のことが分るのです。高天原は腹と書いたら、現代人はすぐわかります。天之御中主神、これは謨字の通りおなかぬしと発音すれば、あ、そうかと分ります。誠にへそが神に相違ありません。

それ故に「新しい道」では、へそは神の座である。自分の臍（魂）を磨きに磨いたら、分に相応して自己完成に到ると申します。

もう、神を遙か彼方に求める時代は過ぎました。同時に真理は外にあるのではなく、最も身近かな我々の内にあるのであります。

求心的完成に向つて

凡そ五十億年前に宇宙ガスが固まって地球となった。三十億年たつてそこに生命が芽生え、やがて

……二百万年前に人類の祖先が地球上に姿を現わした」とダーウインの「種の起源」は教えている。地球を含めて万物は無限から成つて来たのである。この無限の彼方遙かには「真空妙有」の究極のものがあることは誰でも想定される。

こうした究極のものに向つて上昇しようとする人間である。それが宗教となり哲学となり科学となつて発展進歩の長いコースを歩んで来た二十世紀の人類である。それは、究極の一点から遠心的に発展する姿である。

そうしてやがて求心的に完成に向わなければならない。これ物理的絶対法則であります。

三十億年前に蒔かれた一粒の生命の種、いわゆる単細胞の長い時代を経て、二百万年前に漸く肉體人間が地球上に現われたのです。

この時代の人類の祖先は、肉体的にはできていても、脳髓細胞未発達のために、ずっと後代まで知性が蒙昧であつた。

やがて脳細胞が出来ると共に、人間は有史以前にすでに肉體人間が完成していたものと考えられる。然もそれは、十数万年前の時代である。爾後の時代に於いて、高度にできた脳細胞の組織を育成し、訓練して知性が仕込まれたのである。

私は、三十億年前の単細胞時代から、肉體形成時代に到る歴史以前を「人類の前史」と仮に名付ける。そして肉體の完成と共に、知性育成の時代に到る歴史の以前を「人類の中史」と申します。

実に三十億年という遠い／＼永い／＼歴史を経た人類は、二十世紀の今は、知性文明の華を咲かせたのであります。

以上述べましたのは、遠心的進歩発展であります。明日の新しい世紀を開く為には、今日までの様な進歩発展ではなく、求心的人間完成への天の秩序に基づく軌道に乗らなければなりません。

人類の三十億年の永い歴史は、天の秩序即ち遠心的発展の軌道にのせられて、今日に到つたのであり

ます。

明日の人類は、究心的完成への軌道に乗らなければなりません。それは百八十度の大転換であり、同時に人間の知性では発見できない高次の軌道であります。

この天の軌道（宇宙の大秩序）に乗り得るものは、神の座であり、又地上最高次元に位する「相對妙」の場である靈性へそ（魂）の導きによる外はありません。

このことは、「新しい道」を世に慰斗^{しの}出さしめた天人^{そうえん}草木草垣^{そくまき}女史^{めいし}が次の様に指向しているのであります。

—自分を掘って／＼掘り下げたら

底から無限々々々々が湧いて出て

人は誰でも真に助かる」

（註）本稿のカットは、天地の法則、遠心的進歩發展から求心的完成に到る天の軌道を図解したものです。

現代の矛盾をどうしたら是正できるか

立派な日本人をつくる教育（学園）が、国の理念を無視して、頭脳智の訓練と育成に重点をおいている。それは、テカルト以来、心を基底とするゆえんのものである。

このことは、恰も、床の生花に等しい、根のない文化である。これと同じで、心の奥に内在する高次の基底へその神秘を認め得ない現代の知識人は、東大のその如く、そのエリート意識に基づく総てのものは、崩壊せざるを得ないのであります。

人間というものは、生のスタート以前から死のゴールに到るまで、神秘的臍によって運命が支配され

る。立派な日本になる為には、へそ（魂）を磨き、開くことである。

このへそは無限に繋り民族の歴史の年輪がその妙所に深く刻まれている。これを「新しい道」では、「天に理あり、理は臍にあり」と指向する。私は「臍は神の座」だと世に訴えるものであります。

これは私の独断ではありません。日本では古くから「田毎の月」という言葉によってこのことを教えているのであります。

「月は天に只一つしかない。しかし地上の田圃を耕し、水を満々とたゝえておけば、願わなくても秋の満月は、そのまゝ、田圃毎に美しく映じる」

これ即ち、絶対妙即相對妙である。実に素晴らしい日本民族の叡智の表現であります。

世界は今資本主義と社会主義の二つに大きく分裂しています。

前者はアメリカを主軸とする自由圏でありこれが保守派の流れであります。

後者はソ連を主軸とする共産圏であり、これが革新派の流れであります。

この異なる二つの主流が国と国、民族と民族の対立となり、その抗争は、核兵器の量と新鋭兵器保有競争によって漸く力のバランスを保っておりますが、もしそのバランスが崩れたら、人類の世界は壊滅する外はありません。

しかも、この相反する二つの流れは、一国の政治に、市町村に、学園に、企業に、職場に、家庭にまで及び、社会は対立抗争、イデオロギーの氾濫に悩み、新旧互いに思慮、総スクミの体である。

この様な秩序のない矛盾だらけの世代は、人類史上かつてないことである。どうして、何故こういう時代をつくり出したのか？。又この混乱をどうしたら是正できるだろうか？。

幸いにも私はこの問題に対し、応分な答えができるのであります。

既に述べましたごとく、自己防衛の保護色である人間の知性（心）は、へそ（魂）なる根の繋りを無視し、恰も爪の糸が切れた様に暴走してキリ／＼舞となり、今や墜落寸前の危機であります。

民主主義も共産主義も、ひっきょう人間が立場の相違によって、互いに自分らの都合のよい方法を考へ出したもので、いわゆる虫類なれば保護色に等しい自己防衛の武器である。人間の心（知性）を強力に駆使するものである。

駆使するのは差し支えないが、パイロットなしでは危険である。駆使する心を、秩序に順応せしめ、正しくコントロールする根元（へそ）から切離してしまったのでは、混乱に陥入るのは詮方なしである。そこで、この混乱から救い出して秩序を回復し、世の矛盾を是正せしめんとして、「新しい道」を提唱するのであります。

それは、日本の理念を見なおし、これを新しく身につけて起ち上る我々であります。

古くして古きものは亡ぶ

新しくして新しいものも亡びる

最も古くして常に新しきものは栄える

朝の太陽は、最も古くして最も新鮮な久遠の存在である

新しい道は

日本の最も古い道統を

現代に新しく甦らす

朝の太陽の道であり

世界の平和に通ずる普遍の白道だ！！

—以上テープレコードより抄—

（編集者註）この録音テープは二時間に亘るもので、残り原稿用紙二十数枚あります
が、ページの制約もあり、後半は割愛致しました。

課題に應える

去る四月下旬天村先生ご上京の折、富士銀行雷門支店で「人間疎外」と云われる今日の時代——か、現代の矛盾をどうして是正するか、この課題に應えるものが、「新しい道」である」と約一時間半に亘る講演をなさった。

聴講者の中からセンターへ感想文を寄せられた方があるので紹介させていたゞきます。

田口 尚 三十二才

過日、松木天村先生の「新しい道」と題しての御講話を拝聴いたしました。が、正直の所当初此の種の事柄には全く興味がなかった者です。然し乍ら、醇々と説かれる深い道理に耳を傾けているうちに我が人生途上共感を呼ぶ事柄に多接し得ました。

まず御講話を通じ、宗教ではなく、人間として踏み行ふべき道理、条理を説き明され、将来への道に進み得る様に初歩的な導きを賜るものと解釈、その具象化のあらわれとして現代は遠心と求心の境に位置しており、それが故に世界的に激変の時代である事を強調しておられたが、成程現世の諸情勢の混乱を思う時、ラッガー博士の「断絶の時代」を思い合せれば、根底には共通のものが感じられる。

又太陽に例を引いて「古きものは減びる、新しいものも又減びる。古くして新しきものが残る」という話など、我々には普段太陽を始めとする天然自然の姿や恵みを見たり感じたりしていない訳ではないが、それにしても無関心にすぎない。ここに

の言葉からは単に一つの事柄だけでなく全てに共通する哲理を教えられた感が深い。

最後に全て臆に始つて臆に終る故に、臆に感謝すべきであり、そうすれば結果的には人生が思いのまま、に展開をするとのお話については「新しい道」の教義と、腹の中央に位する臆との結びつきが非常に面白く感じられ乍ら、この持つ意味を良く理解すれば、その教義こそ人間として行ふべき深い道理に根ざしているものと覺つた次第です。

時折に御講話の内容を反駁しつつ深い道理を見究め、人生をより豊かなものとする努力を培つていきたいと願っています。

山崎徹治二十九才

今日の物質文明の行きづまり、企業労働戦争の混迷及び人間革命において生き残る道は何か？

(中略)

人間の本質及び本来の心が失われており、人間らしさの奪回、人間自己疎外の回復が必要であると

警告を与えておられる。心だけが鍵であり、心だけが人間に大古より許された自由の場である。その心に大別して二つの働きがある。快樂と苦痛である。快樂を与えるものに接近し、苦痛を与えるものから遠ざかるとうとする。そして人間は本質的には自己自身の心があり、常に心がけて自己を練磨していなければ利己主義におちいつてしまう。(中略)

この「心」の定義をよく理解し、情性的になりやすい環境を打破するとともに、おかれた環境の中においてよりよく己を発揮せしめる様努力しなければならぬ。



支部

だより

関東地区

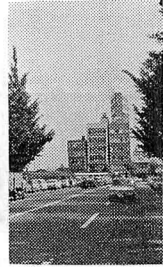
教務局設置に

当つて

此の度、東京・千葉・埼玉・群馬・栃木すべてを包んで関東地区打つて一丸となつて、関東地区推進委員会が發足し、関東地区教務局の開所式が、去る五月十四日午後二時より苑主先生をお迎えして賑々しくひらかれました。

当日は五月晴れのよき日に道友百数十名の出席でありました。

苑主先生の御講話は熱情溢る、なかに関東地区道友が一つ輪になつて、道友同志足りない所を批判することなく補い合つて邁進して



階二階
面二階
正教務
中央東
関東

行く様御指示を与えて下さいまし
た。

教務局長菅原先生からは、今後
ねり合いを熱心に、教務局が
生き生きと活気に満ちる様道友に
呼びかけられました。

おやかた様から御指図の明年中
に東京道場の設置について村尾委
員長よりお話がありました。

東京都港区青山二丁目——明治
神宮外苑の銀杏並木を通して絵画
館と向かい合う素晴らしい所です。
萌える様な若葉が舗装道路を染め
分けて真直ぐに伸びて、映え合う
光が教務局の中迄流れ込んでいま
した。

関東に根がおりて——私達は
ねりあいを熱心に、ねりあいを良
くし、ベタ／＼になる様におやか
たさまから常日頃お仕入れお仕込

をいたゞいています。平凡ななかにも
得もいえない香りを持つ、その
為にはねりあい、ねりあいの積み
重ねが大切である。

新しい人がどん／＼ふえている
関東地区に於ては青山事務所へお
こしいたゞき、ねりあいをし、亦
訪問し、又時と場合に應じて適切
な会合を開いて、常に前進し、前
進して価値を価値たらしめる様道
友一同誓いを新たにするに到つた
と存じます。

新しい人をお連れすることも大
切であるが、現在つながつてこ、
一年以内くらいの人々に、天の場
の理解を深めていたゞく為、ね
りあい、ねりあい、ねりあいの大
切な事を実行し、実行して行くこ
とが何よりも大切であると、念に
は念を入れて大いに決するところ
であります。

埼玉 内藤泰春 記



東京都港区青山二丁目十一の十五

つちぶちビル二階

TEL (四〇八) 三三二六

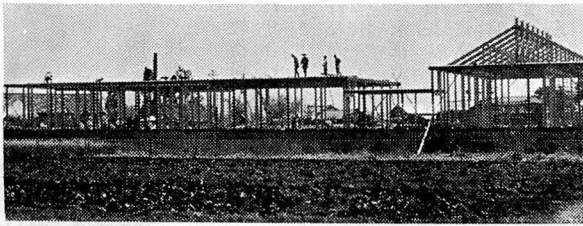


福井道場

上棟式を終えて

去る四月十九日、日本晴れの空を背景に私達の待ちに待った福井道場の上棟式が行われた。当日は丁度本部でも天の場の拡張工事の建前で、思いがけなく同日行われる様になったわけですが、これも天のはからいであつたものと有難くお受けさせて頂きました。

そのうえ一寸気がかりであつた天候までが前日から晴上り、地盛りしたばかりの赤土も、すっかり乾いて足場もよくなり、北陸地方には珍しく、お天気続きで、当日、道友はもとより大工さんや車力の方々も晴れ／＼とした気持で作業に取りかゝられた。ことに棟梁の山神さんは道友の方でもあり、感謝と喜びに満ち溢れて居られた。午前十時に上棟式を挙る様に、通知してあつた為、道友の方々も



同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも
同日同月同日増改築の道場の奇しくも

続々と参集され、男女件せて一三名余り参加された。十時には、一応、紫の間の側柱だけ建上り、その真中に、おやかた様の御指示により簡単な祭壇を設け、式の準備を整える。定刻に

は、蔭山北陸支部長さん、土田武生支部長さんもお出下さり、笠井福井支部長が祭主になって御祓をされる。工事関係者や推進委員等が次々と、玉串を捧げる等、式は簡単であつたが厳肅に取り行なわれた。

式後記念写真を撮映して式の行事を終り、続いて建前作業にかゝる。道友達は「新しい道」の作業衣に身をかため、不馴れな仕事ながらも甲斐／＼しく働かれた。大

工さんは建前に四日間と言つて居られたが順調に作業が出来上り三日間で一応道友達の手傳を終つた。後は大工さん方をお願いして、七月には完成する予定なので、八月からの練合は道場で出来るのではないかと楽しみに待つて居る次第です。

尚正式な道場開きは、おやかた様のお言葉により、十月一日に宛主先生の御来場を得て行なわれる事に決定して居り、道場としての働きは十月からとなるのではない

かと思われます。

扱、道場はこうして笠井支部長さんの熱意と道友達の気負いによつて、支部としては予想以上のものが出来上る訳であります。今後の活動が肝心で、建物に恥じない中身が出来上らねばならない。

福井地方は、全国にも稀な宗教国であり、浮世からの見る目も又厳しいものがあると思わねばならない。

こうした人達に新しい道の我々は、おやかた様が天の命により世直りの為に荊苦勞によつて切り拓いて下された大道を吹き知らせ、先頭に立つて導いて行かねばならない責任がある訳だが、おやかた様がおつくり下さつた、この道を「信と誠」を以て歩ませて頂きました。いと意を新たにしました次第です。

笠井支部長も、任務の重大さを常に指摘され、月六回の厳しい練合を続けて下さつて居ります。よりよい御指導を仰ぎ、我等福井支部の道友は本當に倅せであります。

故に、おやかた様の御恩に報いるべく、道の者としての本分に向つて邁進致さねばならぬと徴力ながらも奮い立って居る次第です。どうぞ道友の皆様今後一層の厳しい御指導をお願い申し上げます。

(福井 金丸富登美 記)

村尾氏ハワイへ

出 発

一九六九年(昭和四十四年)五月二十五日、ホノルルで開催される「ロータリークラブ世界大会」に出席の為、道友村尾義雄氏(関東地区推進委員長)は去る十九日航特別機で羽田を発った。

出発に当り用意した「新しい道」英文パンフレットを携えて、紺碧の空からハワイを訪れる氏の氣負いが察しられる。

ちなみにパンフレット序文を左に紹介する

一「新しい道」提唱者松木天村

先生の各地御講演を要約し、ロータリークラブ世界大会にロータリーアンの一入として列席する光栄と喜びの情を表現する為、さ、やかながらこのプリントを世界のロータリーアンの諸賢に捧げます。

「新しい道」とは日本民族本来の自然観一生かされて生きる」という理念に基く人間づくり、家づくり、国づくりであります。

われわれ日本民族の祖先は自然を今日の如く、宗教・哲学・科学と分裂することなく、これ等が統一されて教育となり、政治となり、産業となり日常の家庭生活にまで及んでいます。

われわれは、こゝに主義の対立を超えて民族本来の高次元の理念を新しく把握して人類の幸福と繁栄に貢献せんことを期するものがあります。

(註・村尾氏は無事大任を果されて、去る五月二十八日帰国されました。)

ゆたかな家庭づくりに東洋信託銀行

＊まとまったお金を安全有利にふやす 〈東洋の貸付信託〉

1口1万円/高利回り
年7分2厘7毛(5年もの予定配当率)
年6分3厘5毛(2年もの予定配当率)
半年ごとの権利運用で
10年後には元金が2倍以上にもふえます

＊積立てではやく有利のための 〈東洋の金銭信託〉

1回5千円以上
年7分3毛(5年以上のもの予定配当率)
年6分2厘(2年以上のもの予定配当率)

いずれも
元金保証/配当年2回
100万円まで非課税扱いもできます
郵便局からも申込めます
無記名式もあります

東洋はこんなしごとをしています

信託のしごと：貸付信託・金銭信託など
銀行のしごと：普通預金・定期預金・当座預金・通知預金・貸付けなど
証券のしごと：証券売買の取次ぎ・証券代行など
不動産のしごと：不動産の売買・鑑定評価など
その他に：おが国唯一の役員管理室



高井和子(写真)

東洋信託銀行 榊原波支店

大阪市南区榊原波新地6番丁3の1(高島屋前)
電話 06 (632) 3 6 2 1

証券投資のことなら……

山一證券



545 阿倍野支店

大阪市阿倍野区阿倍野筋二丁目三番二号(621)1171



編集後記

◇特集「日本の道」（その一）をお贈りいたします。

—この道があるから、国が助かる。こ
ういうのは、それだけの訳がある。訳は
おやおい、おいらす。—

おやかた様がおわしますから、国が助
かるのであります。

「国」とは、と、その命題を本格的にと
りあげるのもっと先の事になると思
います。今回は、胸の底のこゝに、その意
識があるという位の気持ちで編集いたし
ました。

◇折よく道友、関院氏が帰参されま
したので、原稿をお願いいたしましたとこ
ろ心よくおひきうけ下さいました。

「二十一世紀に向う日本の使命」を早速
お送り下さいましたので、こゝに掲載い
たしました。

◇大和書房から、桜木健古著「生かさ
れて生きる」が発行されました。

一般によくわかる「新しい道、おやか
た様（松本草垣女史）」の紹介書でありま
す。

桜木氏の文章は、わかりやすく、ゆる
やかな坂道をのぼってゆくような文章で、
大変読みやすく、平易に書いてあります。

◇七月一杯には、今改築中の「紫の間」
が完成すると思えます。

場の立て替えてあります。

かがり火をかかげて、世に向うために、
編集室もすっかり土台をかためたいと思
っております。

◇東京青山に、関東地区教務局が出来、
その局長に菅原茂次郎氏が就任されました。

福井にも、北陸支部道場がやがて完成
する予定、（只今建築中）、表に裏に、
この道が、ひたひたと、干潟をうるおす
湖のごとく、ひろがってゆきます。

世は、まさに、かわき、つております。

（高坂記）

あ さ 第 2 卷 第 5 号

昭和44年5月25日印刷、 頒価 150円

昭和44年6月1日発行、 送料 45円

発行人 矢野誠 一
編集人 小野佳 二

発行所 宗教法人苑 新しき道の場

大阪府羽曳野市埴生野294

☎ 0729 (56) 0944

2451

印刷所 東洋プリント株式会社

堺市海山町4丁166

☎ 堺0722(3)5785-7

新しい道の場 道しるべ

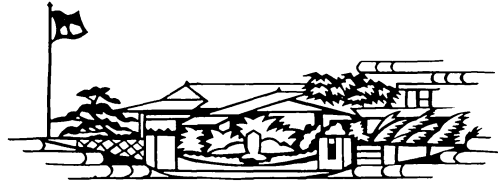
近鉄あべの駅から

* 準急（古市、河内長野、御所、吉野行）で藤井寺駅下車

バス（羽曳ヶ丘八丁目行）で羽曳山住宅前下車
 （四天王寺学園行）

* 急行（吉野行）で古市駅下車

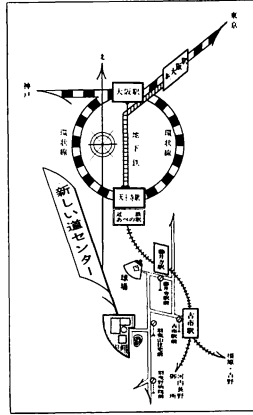
バス（羽曳ヶ丘八丁目行）で羽曳山住宅前下車
 バス停より南一〇〇米



新しい道センター

大阪府羽曳野市植生野二九四

☎ 大阪 阪南（〇七二九）
 2451番



教の泉

|| 天人女史語録集 ||

上製

A5判 四五〇頁
 頒価 二、〇〇円

天の理

|| 紫の間ご垂示抄 ||

上製

A5判 一八〇頁
 頒価 一、〇〇円

苦難の中に光あり

|| おやかた様書簡集 ||

上製

A5判 二八〇頁
 頒価 一、三〇〇円

矛盾を超えて

|| おやかた様の伝記 ||

版及併

A5判 七八五頁
 写真版 二六頁
 頒価 二、五〇〇円



暮らしの向上に 企業の発展に

お近くの《サンワ》を
ご利用ください

〈貯める〉〈使う〉〈借りる〉がこのセットでOK!

サンワ | **ファミリー** 預金 **セット**

普通預金、ネットサービス預金、自由積立預金に、紙質のご便宜もセットしました。

まとめて残したいとお考えの方に…

サンワ | **定期預金**



みなさまのお役に立つ

三和銀行